

間室 (そろそろ迷つて来る) いえね、僕も實はその内に、機会があつたら獨逸語の方も習ひたいとは思つて居たんだ。——其虚へ行くと、君なんぞは英佛獨が行けるんだから美しいよ。

河田 僕を羨しがつて居ないで、先生もやつたらいぢやありませんか。實は僕の知つて居る獨逸人で、此の頃獨逸語の個人教授をやつて居る人があるんです。一週に三度で月謝は五圓ださうですから、毛唐にしては割りに安いです。おやりになるなら早速紹介致しますよ。

間室 さうさね、さう云ふ人があるなら習つてもいいね。

河田 損はないから習つて御覽なさい。日本の有名な小説家だつて紹介したら、きつと向うでも喜びますぜ。それにちよいと美人ですよ。

間室 (忽ち、嬉しさうな笑を見せて) へえ、それぢや女なのかい？

河田 ええ、まだ三十ぐらゐの未亡人でね、話をして居ると何となく西洋の小説でも讀むやうないい気持ちがありますよ。僕が此の間尋ねた時には、馬鹿に熱い日で、薄^うい、腕^{うで}の邊が透き徹^とるやうな白い夏服を着てましたつけ。

間室 (わざと平然たる態度を装ひつゝ) さうかい、それぢや兎に角習ひに行くから、先方の都合を問ひ合はせてくれ給へ。極めた以上は成る可く早い方がいいな。

河田 よござんす。承知しました。早速問ひ合はせて御返辭しませう。……ところで何ですか、

此の頃は語學の稽古なんぞなすつて居らしやる様子だと、何もお書きにならないんですか。

間室 まあ暇なやうなもんだね。來月の雑誌へ短篇を一つ出す積りだが、もう大部分出來て居るので、別段差し迫つた用事はないんだ。此れから僕は君等に負けずに大いに勉強する氣だよ。

河田 でも先生は濫作をなさらないからえらいですなあ。外の作者は、月に二つ三つも書く人が居るぢやありませんか。

間室 (得意さうに小鼻をヒクヒクさせる) そりやまあ、僕なんぞはあんまり書かない方かも知れないが、外の人だつて金に困るから濫作するので、大いに同情しなければならぬさ。僕は濫作をしない代りに借金を背負つて居るから、同じ事だね。

河田 しかし藝術家として、濫作をするより借金をする方がいいぢやありませんか。

間室 だが名譽にもならないだらう。あはははは。

河田 そんなにお暇なら、ちと旅行でもなすつたらどうです。陽氣がいいから上方へでもいらしたつたら面白いでせう。きつと小説の材料が見つかりますぜ。

間室 うん、實は僕はね、近々に南洋の方へ出かけるかも知れないよ。

河田 南洋？ 南洋とは大分遠征をなさるんですな。いらつしやる事に極まつたんですか。

間室 もう大概極まつて居るんだ。南洋と云つても布哇の方なんだが、實はホノルルで發行して居る日本の新聞社の主筆に、僕の友達が居るもんだから、其奴の處へ遊びに行くのさ。

河田 成る程、そりや結構ですな。いつ頃お立ちになるんです。

間室 向うはいつでもいいと云ふんだが、いろいろ此方に支度があるので、立つまでには一二箇月間があるだらう。彼方の滞在費はいらぬさうだが、それでも洋服ぐらゐる作つて行かなきゃならないからね。——何の彼ので又借金が殖ゑるばかりさ。

河田 ですが彼方へ入らつしやれば、いい物が澤山書けるんだから、旅費ぐらゐる何處でも貸してくれるでせう。

間室 さう云へば君は洋服屋を知らないかい。僕は今迄洋服を拵へた事がないんで、知つてる服屋がないんだけど、何處へ頼んだらいいだらう。

河田 あ、そんならちやうど僕の懇意な服屋があります。可なり仕立てが旨いやうですから、彼をお宅へよこしませうか。

間室 ぢや、兎に角よこして貰ひたいね。孰方にしても僕は洋服を作らうと思つて居たんだから、

河田 ええ、せいぜい勉強するやうに云つてやりませう。……ぢやあ何ですな。布哇へ入らつしやるんだとすると、佛蘭西語よりも英語の方が必要になりましたな。

間室 さうだよ。僕は英語の會話ならちつとはしやべれる積りだが、毛唐に早口で云はれるとさつぱり分らない事がある。二三日前にもカリフォルニヤから來たばかりのアメリカ人と話をしたが、日本に居る毛唐と違つて、實に發音が聞き取りにくいね。

河田 さうでせうなあ。

間室 ウオル・マラ・ユウつて云はれたんで、僕はひどくまごついたが、何の事だか君に分るかい。

河田 ウオル・マラ・ユウ？

間室 うん。

河田 暫く考へた後) "What is the matter with you?" ぢやないですか。

間室 (内心は驚嘆しながら、さあらぬ體で) さうなんだよ。僕もやうやう氣が付いたがね。

河田 (ポケットから時計を出して見る) や、もう四時だ。大變お邪魔してしまつて。間室 まだいいだらう。もつと話して行き給へ。

河田 ええ、今日はちよいと此の先まで用事がありますから、いづれゆつくり伺ひませう。

間室 さうですか。ぢや君、忘れずに獨逸人の方をね。

河田 え、よござんす、早速さう云つてやります。洋服屋にもお頼みになるんですね。

間室 あゝ、ついでがあつたら此方へ寄越してくれ給へ。

河田 (ふさ氣が付いて妙な顔をする) ですが先生、布哇へ行つたり獨逸語を習つたり、そんなにいろいろ出来るのですか。

間室 成る程、それもさうだなあ。(あまり出鱈目を云ひ過ぎたので、照れ隠しに眞面目になる) ぢや、

まあ、其の方はどうでもいいや。

河田 (いよいよ妙な顔をする) その方つて？ 孰方ですか、洋服の方ですか獨逸語の方ですか。

間室 (狼狽しながら) う、うん………布哇行きはもう少し先の事だから、洋服屋の方はゆつくりでいいよ。

河田 はあ、承知しました。あ、さうさう、すっかり忘れて居ましたが、僕は先日中野の藤井先生のお宅を訪問しましてね、あなたに暫くお目に懸らないから、宜しくつて云はれましたつけ。

間室 へえ、藤井君の所を訪ねたのかい。久しく會はないが近頃どんな風だね。

河田 あの人も先生と同じやうに濫作をしない人ですな。先生の態度をひどく褒めて居られましたよ。

間室 藤井君はえらいよ。僕にはとてもあの眞似は出来ない。

河田 えらいですなあ彼の人はい！ 濫作もしなければ借金もしないで、あの貧乏の生活によく我慢をして居ますよ。

間室 そんなに貧乏なのかしら。

河田 貧乏も貧乏も御話になららんです。何しろ妻君と子供があつて、月二十五圓で暮らして居るんださうですから、大抵想像が出来るぢやありませんか。殆んど食はずに生きて居るんでせう。

間室 どんな内に住んで居るのだらう。

河田 どんな内つて、そりやひどいですよ、三疊に四疊半に玄關と、三間しかない穢い内ね、二階の三疊を書齋にして其處に先生は朝晩立て籠つて居るんです。尤も二階の窓を明けると郊外の田圃や丘陵や雑木林が一面に續いて、ちよいと見晴らしのいい所です。私が尋ねた時

には先生は鬚や髪の毛をほうほうと生やして、垢だらけの二子の袴を着て、遠くの森を眺めながら泰然と机に向つて居られましたつけ。

間室 當人はそれでもよからうが、妻君がよく辛抱して居るなあ、あの人なんざ、書けばいくらでも原稿料の取れる人なんだから。

河田 全くです。藤井先生がああして居られるのは、一つは奥様がえらいゆゑだと、僕はつくづく感心しました。

間室 そこへ行くと僕ん所のかかあなんぞは仕様がな。下らない事に虚榮心が強くつてね。

河田 ですが何ですな。つまりは藤井先生がえらいから、奥様がそれに服して行くんですな。先生の話だと、妻はよく自分の心を理解してくれて居る。自分は當分の間、あまり仕事に焦らずに、静かな心持ちで讀書と冥想に耽つて居たい。大作を書くのは二三年の後だと云つて居られるんです。

間室 (そろそろ感心し始める) ふうん、さう云ふ風ぢや友達ともめつたに交際しないだらうな。

河田 ええ、人を訪問したりされたりして、詰まらないおしやべりをするのは、無意義だつて云ふのです。そんな事で金を使つたり時間を潰したりするよりか、ちつと獨りで何かを視詰め

て居た方が有意義だと云ふ意見なんです。

間室 そりや藤井君ばかりぢやない。誰しもさう感じて居るのだけれど、斷乎として實行するだけの勇氣がないんだ。殊に僕のやうに、都會で生れた人間は、どうも見えを張る癖があつてね。友達があれば瘦せ我慢して一緒に飲みに出かけたり、いい着物を着たがったり、うまい物を食ひたがったり、ほんたうに悪い習慣だよ。甚しいのになると、道楽をしなければ藝術家になれないやうな考へを抱いて居る奴があるんだからね。

河田 その代り又都會の人には、それだけの長所があるんだから、一概に、悪くも云へないでせう。

間室 いや駄目だね。われわれが此の見え坊を止めない間は、どうしても眞面目な藝術は作れないね。それも家に相當の財産があるならいいが、貧乏の癖に贅澤をして、而も年中金の心配に追はれて居たら、ロクな物が書ける筈はないぢやないか。——藤井君は二十五圓で暮らすと云ふが、僕の内なんざ、月にどうしても二百圓かかるぜ。

河田 (眼を圓くして) 二百圓ですつて？ そりや大變だ。随分派手に暮らして居らつしやるやうだけれど、それにしても多過ぎますな。

間室 僕と家内と子供と妹と女中の五人暮らして、藤井君の八倍もかかるんだからひどいぢやないか。此れから少し氣を附ければ、少くとも百圓以下に切り詰める事は容易だと思ふ。——さうして出来るだけ節約して、借金の心配を除かなかつたら、とても落ち着いて勉強する事は出来やしない。——藤井君のやうなのがほんたうの藝術家だよ。僕なんぞ割りに濫作をしないと云つても、たまには金に攻められて、よん所なく書くやうになつちまふんだから。

河田 大さう藤井先生に感服なすつたやうですね。

間室 うん、實際感服した。とうから感服して居るのだが、此の頃は特にその感が深い。僕も大いに見習はなかつちや。

河田 歸らうと思つたのに又すわり込んで、話しちまつた。それぢや此れで失禮します。

間室 さうかね。今日は何もお構ひしなくつて、その内にゆつくり遊びに入らつしやい。

河田 ええ有り難う、左様なら。

間室 ああ左様なら。

間室、河田を廊下まで送つて、部屋へ戻つて来るさ、腕組みをして、頻りに何か考へながら座敷を住つたり來たりする。やがて、ホツと太い溜息をついて、縁側の椅子に腰を押し、悄然と

頭垂れて沈黙する。舞臺暫く沈黙。

静子が這入つて来る。

静子 (椅子の傍に歩み) あなた、先の端書に返辭をお出しになつて?

間室 いや、出さない。(と云つて、更に溜息をつく)

静子 でも何とか返辭をお出しになつた方がいいわ。威嚇しだらうと思ふけれど、若しもやつて來られると困りますもの。

間室 (上の空で) うん。

静子 原稿はいくらかお書けになつたの。

間室 まだ一枚も書けない。今日は頭が悪くつて、とても駄目だ。明日鈴木がやつて來たら、譯を話して斷つてしまはう。書けないものを無理に書いたつて、ロクな物は出来やしない。

静子 それぢや何處かで、お金を都合して來て下さらなきや仕様がなわ。内にはほんたうに、もう五十錢しか残つて居ないのよ。

間室 (出し拔けに)……おい、己はな、事に依つたら内を引越さうかと思ふよ。

静子 又そんな事を云ひ出して! まあ、あなたぐらゐる氣紛れな方はありませんわ。

間室 いや、今度こそ氣紛れぢやないんだ。いろいろと考へて見た結果なのだ。——今のやうにして暮して居たら、客は来るし、付き合ひはかかるし、借金にばかり追はれて居て、とても立派な創作なんぞする事は出来ないから、何處か郊外の、安い所へ引越して、當分節約しようかと思ふんだ。

静子 節約だなんて。あなたに其れが出来ると思つて居らしやるの。

間室 決心次第で出来ない事はないさ。己ばかりが其の氣になつても、お前たちの了見がグラグラして居ちや駄目なんだから、皆にさう云ふ覺悟になつて貰ひたいんだ。——さうして一つ澁谷か代々木の方にも、十圓ぐらゐの借家を見附けて、月々五十圓程で暮すやうにして行くのだ。さうして己は、靜かに、ゆつくりと、讀んだり書いたりして見たい。秀れた藝術を作る爲めには、そのくらゐの貧乏は己むを得ない。

静子 ぶツ（き吹き出して）あなた、十圓の家賃の内に五人の人数が住まへると思つて居らつしやるの？

間室 女中なんぞには暇を出すさ。お前も居るし妹も居るのに、もともと女中を置くと云ふのが贅澤過ぎた話なんだ。

静子（さうさう腹を立て、）あなたは眞面目で仰しやるの其んな事を？ それでなくつても子供が泣いてうるさいと仰つしやる癖に、狭い内へ這入つて、女中も使はないで、どうしてあなたに勉強なんぞが出来るもんですか。考へて御覺なさいな。一と月もやれば直ぐ嫌になつて贅澤を始めるに極つて居ますよ。何も引越しをしないでだつて、此の内に居ても節約は出来るぢやありませんか。

間室 いや、やつぱり家を取り換へなければ氣分が一掃しないからな。

静子 そんな事を云つて居るから、いつ迄立つても節約が出来ないんですよ。第一、建具屋に障子を誂へたり、植木屋を入れたりして置きながら、又引越したなんて、それだから無駄なお金があるんです。

間室 建具屋なんか、今日のうちに端書を出して、斷つちまへば済むぢやないか。

静子 それにあなた、澁谷だの代々木だの、遠方へ越してしまつて、春ちゃんの女學校の方はどうなさるの？ そんな淋しい所へ行つて、あなたに夜でもあけられたら、女ばかりで無用心で仕様がないわ。

間室 己はもう内を明けるやうな事はしない。その爲めに郊外へ引越すのだ。

静子 どうだかアテになるもんですか。

間室 馬鹿、貴様みたいに話の分らない女はないな。兎に角建具屋へ断つてやるから端書を持つて来い。

静子 勝手になさいませよ。私わたしや知らないわ。——よく考へて見もしないで、今日けふ思ひ付いて、今日きめなくつたつて、よささうなものぢやありませんか。

間室 馬鹿を云へ。此の間から考へた結果だと云つたぢやないか。

静子 嘘よ。きつと先河田さかさんから、誰かの話を聞かされて、ふらふらと、その氣になつたんだわ。

間室 馬鹿を云へ。——餘計な事を云はないで早く端書を持つて来い。

間室は少々受け太刀になつて、「馬鹿を云へ」一點張りて應戦して居る。

女中が一通の手紙を持つて来る。

女中 旦那様、あのう、書留が参りました。

間室 え？ 書留？

間室、思はずぶるぶるを手を顫はせて女中から郵便を受け取り、急いで封を切る。

静子 (夫の手の中を覗き込みつつ) あなた、今時分書留が何處から来たんでせう。

夫婦の語氣が次第に優しくなる。

間室 西山堂から来たんだよ。あまり返辭が来ないから駄目だと思つたら、此の間の話が纏まつたんだ。

静子 さう、でもまあよござんしたわね。いくら送つて来ましたの？

間室 ちやうど此方から云つてやつただけ——百圓来たよ。

女中 (その時までぼんやりと傍観して居て) あの、郵便屋さんが認印を捺してくれろと申します

間室 お、さうだ、さうだ、静子、此れをお前に預けて置く。(爲替を彼の女に渡す) 認印を早く出してやるがいい。

静子 (非常に機嫌のよい、訝え訝えとした馴らかな聲で) はあ預かつて置きますわ。——ねえあ

なた、先の話はよく考へてからになさいましな。

間室 (いいとも悪いとも答へないで) 郵便屋が待つて居るよ。認印を早くしてやれよ。

静子 ぢや、建具屋へ出す端書は、今でなくつていいんでせう。

或る男の半日

二〇八

間室 うん、まあいいや。

と云つて、極まり悪さうに立ち上り、ぐるりと、妻の方へ脊を向けて、再び室内を彼方此方歩
き廻る。妻と女中とが急ぎ足で退場する。

—幕—

蘇 東 坡 (三幕)

(或は「湖上の詩人」)

時 宋の神宗皇帝の時代

所 杭州府 南方支那西湖の畔にある城邑

人 物

蘇東坡 詩人 當時杭州府の通判と云ふ役を勤めて居る

毛澤民 詩人の同僚

吳小一 吳服商人

張二 扇子賣り

朝雲 妓生 詩人が愛して居る女

群芳 妓生 毛澤民が愛して居る女

琴操 妓生

蘇東坡

蘇 東 坡

二二二

高 登 妓生

鄭 容 妓生

その他府の役人市民等大勢

第一幕

杭州府衙門内の廳堂。——此處は庶民の訴を聽く場所、徳川時代のお白州のやうに階の前が石甃を敷いた廣場になつて居る。堂上まごころごころに役人の執務する机や椅子が並べられ、中央に通判の席が設けてある。堂の背面には柱廊があり、その柱の列の向うには、南園らしい麗かな青空が見え、遠く西湖の水が翡翠色に輝きながらチラチラさざ波を漾はせて居る。時は秋の末であるが、ちやうど日本の四月頃に似た暖かい氣候で、ほかほかと睡くなるやうな日の午後。下手の方の大きな菊の花瓶を飾つた卓の前に、二人の書記生が向ひ合つて事務を執つて居る。

幕が開くまもなく、廣場の下手から毛澤民が出て来る、才子風の優雅な美男子である。

毛澤民 はてな、東坡先生はおゐでにならんかな、……………

ちよつと立ち停まつて考へ、書記生等に聲をかける。

毛澤民 君、君、先生は何處におゐでだらう？

書記甲 先生ですか、先生は二階にゐらつしやいます。何か御用ならお呼びして参りませう。

毛澤民 では毛澤民がお暇乞ひに出ましたと、さう云つてくれ給へ。

書記甲 お暇乞ひに？

毛澤民 ああさうだよ、大分延び延びになつてしまつたが、旅の支度も出来上つたから、今日はどうしても出發しなかりやならないんだ。

書記甲 よろしうございます、兎も角もさう申し上げて参りせう。

書記甲、柱廊の上手へ退場。

書記乙 いよいよお出かけになりますかな、お名残り惜しうございますな。

毛澤民 君たちにも長々御厄介になつたが、もう此れでお別れだよ。

書記乙 あなたが居らつしやらなくなると、明日から此の役所も大分淋しくなりますなア。せめてもう四五日もお延ばしなすつては如何です。

蘇 東 坡

二二三

毛澤民 何卒そんな事は云はないでくれ給へ、それでなくつても立つのが嫌で仕様が無いのに、さう云はれると猶更悲しくなつて来るよ。

書記乙 しかし何でせう、都へお出でになれば田舎と違つていろいろ面白い事がお有りでせうし、いづれ何處ぞへ御榮轉になるのでせうから、結構な譯ぢやございませんか。

毛澤民 結構な事なんかありやしないさ。都と云ふ所は君たちの考へて居るやうな、好い所ぢやないんだからね。

書記乙 すると矢張り、此の杭州に勝る所はありませんかな。

毛澤民 さうだとも、何と云つたつて杭州が天下第一さ。景色は佳し、喰ひ物はうまし、氣候は暖かだし、女は綺麗だし、それに人氣が穩かだから、こんな住み心地のいい所はありはしない。斯う云ふ土地に居ると、人間は長生きをするね。

書記乙 そんなもんかも知れませんが、私などは一生此處で老いほれてしまふんですが、役所の仕事は樂ですし、東坡先生はあの通り氣さくな方ですから、此れで長生きが出来さへすりやあ、先づ仕合せだと思はなければなりません。

毛澤民 ほんとに君たちは羨ましい。僕などはお上の命令でいつ何處へ轉任するかも知れないん

だから、まるで萍のやうなものさ。地位や月給が上つたからつて嬉しくも何ともないよ。……

書記生甲が戻つて来る。

書記甲 毛澤民先生、どうもお待たせ申しました。

毛澤民 御都合はどうだったかね？

書記甲 エエ、實はその、東坡先生は唯今御酒を召しあがつてゐらして、大分銘酎の御様子でな、……

毛澤民 ハハア、相變らずと見えるね。

書記甲 それでお取り次ぎをしましたところが、お別れに一獻差し上げたから是非二階へおいで下さるようにと、さう仰つしやつて居らつしやいます。いかがでせう、彼方へ入らしてつてお相手をなすつては？

毛澤民 さあ、どうしたもんだらう？ ちよつとお顔を見て行きたいが、酒が始まるとつい長ッ聲になるんでなあ。

書記甲 まあ宜しいぢやございませんか、折角ですから。

毛澤民 いや、今日はそんなにグツグツしては居られんて、一日一日と出立がおくれるばかりだから。

書記甲 でもちよつと如何です？ もう今日かぎり杭州の酒の飲み止めだと思し召して。

毛澤民 その飲み止めと云ふ奴がナカナカさうは行かんのだよ。此の間から何度飲み止めをやつたか知れないが、一向収まりが付かないんだ。

書記甲 あはははは、さうでもございませうが、此れでほんとの飲み止めとなすつたら如何です。實は今しがた錢塘江の鯛が獲れたので、それを肴に御酒が始まつた譯なんです。

毛澤民 錢塘の鯛か、あれがあるとちよつと飲めるな。

書記乙 あの鯛の味は格別ですから、北の方へ入らつしやると、あんな生きのいい魚は喰べられませんよ。

毛澤民 おい、おい、好い加減にしないか、そんな話をするのは罪だよ。

書記乙 それではいつそお會ひにならずに、お出かけになりますか。

毛澤民 左様さ、お目に懸らないのも失禮だし、二階へ行くと怪しくなるし、どうも困つたものだ。まあもう少し此處でお待ち申すでしょう。

書記甲 そりやあ駄目ですよ、何しろエライ御機嫌で、腰が立たないくらゐぐでぐでに酔つ拂つておるですから、とても下へは入らつしやいますまい。

書記乙 どうしても二階へ入らつしやらなけりやいけませんな、杭州の酒の飲み止めで、錢塘の鯛の喰ひ止めをなさるんですな。

毛澤民 チョッ、仕方がない！ ではちつと行つて来るか。——此の鹽梅ぢや今日も立てなくなりさうだぞ。

毛澤民頭を掻き掻き柱廊の下手へ這入つて行く。その後ろ影が見えなくなる。書記生眼を見合せて笑ひ出す。

書記甲 毛澤民さんも、大分此の土地には未練がありさうだね。

書記乙 今も散々泣き言を並べて居たがね、あの人の身になつて見ると、此處を離れるのは嚙辛いだらうよ。

書記甲 色男にはなりたくないものさ、斯う云ふ時に泣きの涙で別れなけりやあならんからね。
書記乙 全くだよ、あれだけの女にああまで惚れられちや、何ほ何でも、男冥利が好過ぎるからな、まあ罰が中つたと云ふもんだらう。

書記甲 しかし毛さんに轉任を命じるなんて、東坡先生もナカナカ人が悪いね、自分だつて朝雲の唇を追つかけて廻して居る癖に、少しは察してやるがいいんだ。

書記乙 なあに、それは毛さんの方が悪いんだよ。私には此れ此れの女がございますからと、思ひ切つて白状すればいいのに、イヤに遠慮して隠して居るもんだから、とうとうこんな事になつちまつたのさ。先生は捌けた方なんだから、譯を話しさへすりやあ何とかして下さるんだ。

書記甲 さうよなあ、詰まらん遠慮をしたもんだなあ、全體あの人は女に持てるだけあつて、氣が弱いからいかなのだなあ。

廣場下手より取り次ぎの役の少年登場。

少年 書記さん、書記さん、今日は暇だと思つたら、やつと一人訴人がやつて來ましたよ。

書記甲 來たかね、來たら此處へ通しなさい。

少年 南庫の和樂樓の高登と云ふ藝者ださうです。ちよつと可愛い女です。

書記甲 餘計な事を云はんでもいい、さつさと連れて來なさい。

少年口笛を吹きながら軽快な足取りで立ち去る。

書記乙 和樂樓の高登と、……聞いたことがあるやうだな。

書記甲 ほら、あの西院街の生樂屋の亭主を旦那にして居る女だらう。

書記乙 うん、あの女か、それちやいよいよ引かされるんで、落籍の許可を願ひに來たんだな。

書記甲 まあそんな事だらうよ。

書記乙 だが此の頃はメッキリ訴訟沙汰が少なくなつて、たまに事件と云やあ、藝者の落籍ばかりぢやないか。まるで此の役所は身請け相談所のやうな形だね。

書記甲 訴訟沙汰が少いのは天下泰平の徴なんだから、大いにめでたい譯さ。われわれは毎日役所で居睡りをして居て、時々藝者の顔が見られて、それで月給が貰へるとすりやあこんな有り難い事はないよ。

高登が少年に導かれて廣場へ出て來る、手に一通の願書を持つて居る。

少年 (案内しながら) さあ、君此方だよ、此方へ來給へ、此處はお役所だからお茶屋でやるやうにデレデレしちやいけないよ。成るだけ眞面目な顔つきをして、その願書を斯う云ふ風に、(と、身振りをして見せる) 両手で丁寧に差し上げて、あの階段の所へ行つて、お辭儀をするんだ。

高登 斯うなの？（少年の身振りを真似ながら） 斯う云ふ風にやればいいの？

少年 うんさうださうだ、それから哀れつほい聲を出して「お願いでございます」って云ふんだ。

さうすると、そら、彼處に役人が居るだらう、あの人がやつて来て其の願書を取り上げてくれる、それから東坡先生が御出席になつて裁判をして下さるんだ。

高登 あら、東坡先生が？——

少年 さうだよ、君は先生を知つてるのかい？

高登 ええ知つてるわ、二三度お座敷でお目にかかつた事があるの。

少年 知つても知らない風をして、濟まして居なけりや駄目なんだよ、此處はお役所なんだから。

高登 だつてあたし、極まりが悪いわ。……

少年 なあに大丈夫だ、心配しないで僕の云ふ通りやつて見給へ。それに今しがたお酒が始まつたやうだから、しめたもんだよ。先生は酔つて居らつしやると何でも「うん、うん」と承知なさるんだ。

高登 まあ随分ね、お役所に居らしつて警間からお酒を召し上るなんて。

少年 そりやあ君仕方がないさ、先生はただの役人ぢやないんだもの。詩人に酒は付き物ぢやな

いか。——それぢや僕は失敬するよ。

少年再び口笛を吹きつつ退場。

書記等はそれ迄の間ニコニコ笑ひながら様子を見て居たが、少年が引込むと同時に威儀を取り繕つて儼然と控へる。

高登 （階段の下に來り、教へられた通りにして） お願いでございます。

書記甲 何だ？

高登 あの、わたくしは南庫和樂樓の官妓をして居ります高登と申す者でございます。少しお願いの筋があつて参りました。

書記甲 願書を持つて來たか？

高登 はい、此處に持つて居ります、どうぞ御覽下さいませ。

書記甲願書を取つて席へ戻り、机の上にひろげて讀む。乙もそれを覗き込む。高登はちつと階段の下に平伏して居る。

書記甲 ははあ、此れは落籍願だね。

高登 左様でございます、長らく皆様の御最辰に與りましたが、今度堅氣になりまして、良人に
従ひたいと思ふのでございます。

書記甲 ふん、成る程、……で、その相手は誰だね？

高登 はい、あのう、……それを申し上げなけりやいけないのでございませうか？

書記甲 いけないと云ふ譯でもないがな、まあ執方かと云へば、申し上げるに越したことはない
やうだな。

高登 あら！ そんな事を仰つしやつてお黷りなすつては嫌でございます。

書記乙 あははははは、云はなけりやあ云はんでもいいよ、ちやんと種は上つて居るから。

高登 どうぞ何も彼もお察し下さいまして、お許しが出来ますやうにお取りなして下さいまし。ほん
たうにお願ひでございます。

書記乙 よし、よし、まあ何と仰つしやるか先生に伺つて見なけりや分らんが、今ちよつて御用
中だから暫く待つて居るがいい。

少年登場、忙しきうに廣場を駆けて来る。

少年 書記さん、書記さん！

書記乙 何だ？

少年 又一人來ましたぜ。

書記乙 又來たか。今日は大分忙しいぞ、今度のは何者だね？

少年 やつぱり藝者です。

書記甲 いやはや、どうも驚いたね。

少年 北庫の春風樓の鄭容と云ふ女ださうです。

書記甲 どうせ又落籍だらう。

書記乙 面倒だから一緒に片附けてしまはうぢやないか。

少年 それぢや直ぐに連れて來ませうか？

書記乙 ああ連れておいで。

少年 承知しました。

少年退場。

書記乙 (甲に向つて) 君、どうしたもんだらう、先生はまだお濟みにならないだらうか？

書記甲 あの鹽梅ぢやあ多分晩まで打ち通しだらうと思ふがね、ちよつとでいいから今の内に御

出席を願はうぢやないか。

書記乙 だが大丈夫かしら？ そんなに酔つて居らして。

書記甲 なあに、毎度の事だから何でもないさ、酔つ拂つて居らしたら僕が引つ擔いで来るよ。

書記甲、柱廊の上手へ立ち去る。

少年が鄭容を連れて来る。

少年 (案内しながら) そら、彼處に一人君のお仲間が居るからね、あの階段の處へ行つて、今致へた通りにすればいいんだ。

鄭容 あら！ 高登さんが居らつしやるわ。

少年 しつ、しつ、お役所の中で餘計な事を云ふんぢやないッたら！ いいかい？ 分つたかい？ しつかりやり給へ。

少年鄭容を残してフィミ下手へ這入つてしまふ。

鄭容 (階段のほとりに跪き、高登と同じやうにして願書を捧げながら) お願ひでございます。

書記乙 何だ？

鄭容 わたくしは北庫春風樓の官妓をして居ります鄭容と申す者でございます。少々お願ひの筋

がございまして……

書記乙 ああよし、よし、その願書を見せなさい。

願書を受け取り、さつと眼を通して机の上に置く。

書記乙 お前も落籍を願ひに来たんだな。

鄭容 左様でございます。お許しが出来ますでございますか？

書記乙 そりや出ないとは限らんがね、一體お前たちのやうに賣れッ兒が揃ひも揃つて、さうどうも商賣を止めると云ふなあ穩かでないね。土地の花柳界がさびれるばかりだよ。

鄭容 まあ御挨拶で恐れ入りますこと！ わたくしなんかとてもそんな賣れッ兒ぢやございませんわ。「揃ひも揃つて」だなんて、高登さんがお氣の毒ですわ。

高登 あら！ 鄭容さんは随分だわ！ あなたこそあたしなんかよりズツと賣れッ兒ぢやあなかつて？

鄭容 あんな嘘ばツかり！ 藝だつて器量だつて、あたしあなたの足もとにも追つ着きやしないわ。

高登 そりやあたしの方で云ふ事よ。あたしこそお多福の藝なし猿よ。

鄭容 あらいやだ！ どうぞお静かに願ひます。

書記乙 これ、これ、好い加減にしないさい、役所で喧嘩をするやつがあるか。

高瑩 だつてあんまりなんですもの。

鄭容 でもあたし、高瑩さんと一緒にされちや詰まらないわ。

二人ともだんだん行儀が悪くなつて甘つたれた聲を出し始める。柱廊上手より通判蘇東坡が書

記生甲に伴はれて来る、酔歩蹒跚たる様子。

書記甲 (よろけさうになる東坡の體を支へながら) オツと、お危なうございます。……もし、も

し、そちらへ入らしつちやいけません、此方でございます。

東坡 分つてるよ、分つてるから大丈夫だよ、うーイツ……ああ好い心持ちだ、……

書記乙 (妓生等に向ひ) これ、先生のお出ましたぞ、兩人とも其處に慎しんで控へて居なさい。

兩人急に居すまひを直して平伏する。東坡は書記生に扶けられて漸く通判の席に就く。

書記乙 先生、どうも御酒興申のところを飛んだお妨げをいたしましたして、甚だ恐れ入ります。

東坡 あはははは、大分堅苦しい御挨拶だね、さう云はれると吾輩ちよつと返答に困るて。

書記乙 どういたしましたして、いつも御機嫌で結構に存じます。

東坡 うーイツ……(よろよろこして椅子から轉げさうになる) や、此りやあいかんど、今日の酔ひ

方は特別だぞ、斯うして居ると何だか眼の前がチラチラして来る。(朦朧と眼を睜き、階段に

跪いて居る妓生等の姿を認める) ほう、これは不思議だ、わしは酔つ拂ふとよくこんな事があ

るんだが、彼處に斯う、綺麗なものがチラチラして居るのは彼りやあ何だな？ それとも私

の眼の加減かな？

書記甲 彼處は居りますのは、あれは訴人でございます。

高瑩 お願ひでございます、……

鄭容 どうぞお情けをもちまして、お聴き届けなされて下さりませ。

東坡 ほう、大分多勢居るやうだな。

書記甲 いえ多勢ではございません。二人だけでございます。

東坡 二人には見えんぞ、わしには別嬪の顔が五つ六つ見えるぞ。

書記甲 あはははは。

書記乙 (二通の願書を差し出す) 先生、御面倒でもちよつと此れを御覽下さいまし。此の二人は

孰れも官妓でありまして、落籍の許可を願ひたいのだと申して居ります。

東坡 ふん、よし、よし、成る程、南庫和樂樓の高登と申すのは其の方が。

高登 はい、私わたしでございます。

東坡 其の方は此の度び藝者稼業を止めて良人りやうじんに従ひたいと申すのだな？

高登 御意にございます。

東坡 エエと、それからと、……北庫春風樓の鄭容と申すのは其の方が。

鄭容 はい、私わたしでございます。

東坡 其の方も落籍が望みと見えるの？

鄭容 御意にございます。

東坡 あはははは、何も役所へ来たからと云つて、さう改まつて、ペコペコお辭儀をせんでもよい。お前たちに餘り切り口上でやられると、折角の酒が醒めるからな。

鄭容 恐れ入りましてでございます。

東坡 しかし何だな、お前たちのやうな綺麗所きれいなところが、今の若さで止めると云ふのは甚だ以て不心得の話だな。

書記乙 それ見ろ！ 己の云つた通りだ。

東坡 何だね、何かあつたのかね？

書記乙 いえ、何もあつたのぢやございません。ちよつと獨り語を申しましたので、……

東坡 なんと物は相談だが、もう一と稼かせぎして見たらどうだ？

高登 (泣き聲になつて鼻を鳴らしながら) だつて先生、そんな事を仰しやつてあたしほんとに困つてしまいますわ。實は約束した人があるんですもの。

鄭容 あたしだつてさうですわ先生、……

書記甲 これ、これ、のろけを云ふ奴があるか、此處を何と心得て居る？

東坡 あははははは、イヤなかなか面白いぞ、わしはお前たちのやうな美人連に「先生先生」つて云はれて、左右から取つ付かれたのは今日が始めてだて。かうなつて見ると役人も悪くはないな。

高登 (いよいよ甘つ垂れる) ねえ、先生、先生はほんとに焦これたいわ。お願いですから聽いて頂戴よウ！

鄭容 ええ先生、あたし手を合せて拜みますわ。

東坡 待て待て、今判決を書いて遣つかはすから。

高登 それぢや許して下さいませうの？

東坡 さあ、許してやらうかな、それとも許してやるまいかな、兎に角書いて見なければならんよ。

さう云ひながら、筆を執つて一氣に判状を書き下す。高登 與ふる判状に曰く「高山白早。瑩骨氷肌。那解老。從此南徐。良夜清風月滿湖。」鄭容に與ふるものに曰く「鄭莊好客。容我樓前。先墮憤。落筆生風。籍聲名不負公。」書き終るを、先づ最初の一通を書記甲に渡す。

東坡 此れだ、此れを高登にやりなさい。

書記甲 (判状を取つて見ながら) 先生、此れは一體何でございます。

東坡 それが判決だよ。まあ読んで見給へ。

書記甲 (讀み上げる) 「高山白きこと早し、瑩骨氷肌、那どぞ老を解せん、此れ従り南徐、良夜清風月湖に滿つ。」——ハテナ、先生、此れはたしか木蘭花詞の歌の文句ぢやございませぬか。

東坡 あははははは、君には其れが分らんかね。(他の一通を取つて書記乙をさし招く) 此れ、此れ、此れを鄭容にやりなさい。

書記乙 (判状を受け取り、同じく開いて見、不思議さうに首をかしげる) オヤをかしいぞ、此れも歌の文句のやうだぞ。——「鄭莊客を好む、我を容るる樓前先づ憤を墜さしむ。落筆風を生ずれば、聲名を籍りて公に負かず。」——先生、御冗談をなすつちやいけません、此れも矢張り木蘭花詞ぢやございせんか。

東坡 うん、さうだよ、ちよつと洒落て見たんだよ。

書記乙 (甲に向ひ低聲に囁く) おい、君に此れが分るかね？

書記甲 歌の文句は分つて居るが、此れを判決だと仰しやるのはどう云ふ譯だらう。

書記乙 どう云ふ譯かサツパリ分らんよ。何しろ今日は、御酒が行き過ぎて居るから始末にいかん、あとでゆつくり書いて頂くとしようぢやないか。

書記甲 さうするより仕方がないね、此の判決ぢや役に立たんから。(階段の下に來り、妓生等に諭す) お前たちには氣の毒だけれど、あの通り先生はひどく酔つ拂つて居らつしやるんで、とてもお分りなりさうもないからな、明日でももう一遍出直して來た方がよささうだよ。悪い事は云はんからさうするがいい。

高登 あら、あたしどうしたらいいでせう。

鄭容 困つちつたわねえ。

東坡 こりや、こりや、何をグズグズしやべつて居るのだ。私は、いくら酔拂つても氣は確かだぞ。

書記乙 いえ、わたくしたちは何もその、……決して先生を酔つ拂ひだと申した譯ぢやございませんで、……

東坡 あはははは、どうも融通の利かん男たちだ。折角判決を書いてやつたのに、それが君たちには分らんと見えるの？

書記甲 でも先生、お言葉ではございますが、歌の文句ぢやあちと困りますのでな。

東坡 あはははは、分らんければもう一度此處へ持つて來なさい。

書記甲乙兩人、判状を東坡の前に差し出す。

東坡 そら、いいか、歌の文句には違ひないが、よく氣を付けて讀んで見なさい。——「高山白きこと早し」だ、「聲骨氷肌、那んぞ老を解せん」(さう云ひながら、朱で圈點を打つて行く)「此れ従り南徐、良夜清風月湖に滿つ」——それ此處のところに高、聲、従、良、と入れてあるのだ。どうだ分つたらう？

書記甲 ヘヘエ、な、な、成る程成る程「高聲良に従ふ」と云ふ譯ですが、イヤさすがは先生、

どうも恐れ入りました。

東坡 それからもう一つは斯うだ。——「鄭莊客を好む、我を容るる樓前先づ憤を墜さしむ、落筆風を生ずれば、聲名を籍りて公に負かず」——な、此處に此の通り鄭、容、落、籍、とあるではないか。

書記乙 や、此りや素敵だ、歌の文句かと思つたら、判決の文字が詠み込んであるんだ。此りやあナカナカ乙なもんだぞ。

此の間に毛澤民登場、上手柱廊の柱に凭れて、感心しながら裁判の様子に見惚れてゐる。

書記甲 相手が藝者で、判決の文句が木蘭花詞か、——こんな風流な思ひつきは、先生でなければとても出来ない藝當だて。

東坡 あはははは、分つたら女たちに渡してやりなさい。

書記甲 (高聲に判状を渡してやりながら) これを御覽、此の歌の中に「高聲従良」とあるんだ、お前は望み通り良人を持つ事が出来るんだぞ。

高聲 (判状を押し戴き、つくづく讀んで見ながら) あら、どうでせう！ まあ奇態だわね、ちや

んと此處に書いてあるのね、お許しが出たばかりかこんな珍しい物を書いて頂いて、あたしほんとに合せだわ！

書記乙（鄭容に列状を渡す） それ、お前のも此の通り「鄭容落籍」と這入つて居る、——此れでお前の身は自由になつたのだ。

鄭容 まあ！ ほんたうだわ！ 此處にちやあんと私の名前が詠み込んであるわ！ でも先生は何て御器用な方なんでしょう。……

東坡 なあに、私は器用でも何でも無いよ、歌の文句が浮かんだのは、つまりお前たちが美人だからさ。あはははは。

書記乙 詞は洒落てるし、書き手は先生だし、お前たちは飛んだ拾ひ物をしたんだぞ。よくお禮を申し上げるがいい。

高登 先生、まことに有り難う存じます。此のお書き付けは家代々の寶にいたします。鄭容 何と申し上げてよいやら、お禮の言葉もございません。まるで夢のやうでございます。

東坡 さあさあ、もうそんな禮には及ばん、早くそれを持って歸つて好い人に見せてやんなさい。高登鄭容の兩人、立ち上つて下手の方へ歩いて行きながら、嬉しげに語り合ふ。

高登 まあよかつたこと！ 先生は何て捌けた方なんでしょう。

鄭容 やつぱり詩人なんて云ふ者は、普通の人間とは違つて居るのね、あたし、此の書き付けを大事に取つてみんなに見せびらかしてやらなくつちや。

高登 それがいいわね、あたしたちは今日は餘ッほど日が好いんだわ。……
兩人イツイツミとして廣場を去る。

書記甲（乙に囁く） どうだい君、彼奴等はどうまい事をしたぢやないか。美人と云ふ者は合せだな。

書記乙 先生もあの調子だから、紅裙連に持てる譯さ。

書記生等机に向つて再び事務を取り始める。

其の時まで黙つて様子を見て居た毛澤民が東坡の前に進み出る。

毛澤民 東坡先生、唯今の御判決は大分面白うございましたな。

東坡 や、君は其處に居たのか、どうも飛んだところを見られちやつたな。實は今のは一杯機嫌でちよつと徒らをやつたんだよ。

毛澤民 一杯機嫌でああ云ふ當意即妙のお考へが出ると云ふのは、大したものですよ。先生のやう

な詩人でなけりや、とても及ばぬ事です。今更ながら敬服の外はございません。

東坡 あはははばは、そんな事はどうでもいいが、今の事件で折角の酒が醒めちまつた。さあ毛君、此れから一つ飲み直した、是非もう一度付き合つてくれ給へ。

毛澤民 いえ有り難う存じますが、私はさうしては居られませんので、……

東坡 いや、いかんいかん、逃けると云ふのは卑怯だぞ。

毛澤民 ですがわたくしも、今日はどうしても出發しなければなりませんから、何卒もう御勘辨を願ひます。お名残り惜しいのは山々ですが、いつまでお別れの杯を酌んでも際限はありませんし、却つて悲しみが増すばかりですから、此れでほんたう綺麗サツパリとお暇乞ひをいたします。

東坡 ハテナ、どうしたのか今日はひびく剛情だな、出發出發と云ひなさるが、明日にしたらいちぢやないか。

毛澤民 いいえさうは参りません、先達辭令を頂きましたから、今日は立たう、明日は立たうと思ひながら、つい先生のお言葉に甘えて出發の時期を後らせてしまひまして、もう今日で半月にもなつてしまひました。どうせ私も轉任を命ぜられた以上、遅かれ早かれ旅に出なければ

ばならない體でございます。(さう云ひながらホロリと落涙する、東坡はそれに心付かぬ様子)ですからもう何も仰しやらずに、一と思ひに私を立たして下さいまし。

東坡 成る程、これは私が悪かつたかな、酒の相手が一人でも減ると思ふと、心細くつてつい冗談を云つたんだが、都へ行けば君も出世をする譯だから、わしは大いに君の榮轉を喜んで居るんだ。ではもう御遠慮には及ばん、わしもお引き留めはしないからどうか機嫌よくめでたい門出をしてくれ給へ。

毛澤民 (悲しい感情を押し包んで) はあ、有り難う存じます、それぢや先生も御機嫌よろしう。

東坡 君も道中を氣を附けてな、——都で弟の子由に會つたら、此の間の手紙を渡してくれるように。私は杭州の片田舎で、明け暮れ湖水の景色を眺めながら、至極呑氣に月日を送つてる。都に居るよりは結局此の方が仕合せだからと、君からもよくさう云つて貰ひたいもんだね、弟の奴め、私が負け惜しみを云ふんだぐらゐに思ひさうだからな。

毛澤民 お言傳はたしかに承知いたしました。——ところで私は、一つ先生に願ひがあるのです。わたくしも長年の間この美しい湖畔の景色を友として、先生のお側に居たのですからどうか後々の記念になるやうな御近作の詩を一首、餞別として書いて頂きたう存じます。

東坡 いや、其れは困るよ、わしの詩などは三文の値打ちもありはしない、とても君等に見せるやうな代物ではないんだから。

毛澤民 先生、そりやあいけません、そんな御謙遜をなすつちやいけません、先生は當代第一の大詩人です、いくらお隠しになつても私はちやんと知つて居ります。先生の詩は「李白と雖及び難し」と、皇帝陛下までがさう仰しやつてお褒めになつたんぢやありませんか。

東坡 あははははは、李白も私に比べられては嘸かし迷惑をして居るだらうよ。……

毛澤民 そんな冗談を仰しやつてお呆けになつては駄目ですよ。世間の人は先生のお書きになつたものを、金錢に換へても欲しがつて居りますからな。現にたつた今あの藝者たちに書いておやりになつたものはあれは一體何でございます。

東坡 あれはほんの駄洒落でな、木蘭花詞の歌の文句をもじつたのだ、わしは酔つ拂ふと駄洒落は云ふが詩は作らんよ。

毛澤民 あれほどの才をお持ちになりながら、詩が作れぬとは仰しやれますまい。私が日頃どれほど先生の徳をお慕ひ申し上げて居るか、先生だつてよもや御存知ない筈はなからうと存じます。たとへ一句でも一行でもいいのですから、どうか何なりと御揮毫をお願いいたします。

東坡 さあ、さう云はれるとやつぱりちよつと書きたくもなつて來るがね、——私はどうも悪い癖があつて、今迄たびたび詩の爲めに、しくじつて居るもんだから、ウツカリ書く譯には行かぬのでな。

毛澤民 詩を書いた爲めに、しくじりをなすつた？ そんな事がありますか知らん？

東坡 さうだよ、考へて見ると馬鹿々々しい話だが、私が此の土地へ左遷されたのも、もとはと云へば詩の祟りなんだ。「東坡と云ふ奴は怪しからん、詩を作つて時事を諷刺した」と云ふのでとうとうこんな遠い所へ流し者にされたのさ。だから此の上詩を作つたりすると、どんなお咎めを受けかも知れんので、詩人商賣は近頃ふつり止めにしたんだ。

毛澤民 すると先生は杭州へ入らしつてから、一度も詩をお作りにはならないのですか？

東坡 まあ表向きは、作らんことにしてあるんだがね、……

毛澤民 あははははは、しかし内々はお作りになるんでせう。全體杭州のやうな風雅な土地へ流し者にして、詩を作るなど云つたつて其りやあ無理な注文ですよ。此の土地に居ると、詩人でなくても詩を作りたくありませんからな。

東坡 全く君の云ふ通りだよ。實に都を立つ時にも弟の子由の奴がいろいろ心配をしてくれてな

「西湖の景色が美しくても詩を作つちやいけません」などと、くれぐれも忠告されて来たんだが、さて此處へ来て見るとさう云ふ譯にも行かんものだて。別に詩を作らうと云ふ氣はなかつても持つたが病でつい口の先に出てしまふもんだから。

毛澤民 あはははは、イヤ大きに御尤もです。さう云ふ譯なら都へ行つても内證にして置きますから、どうか私には特別を以てお書き下さいまし。先生に詩を作るのを禁じるなんて、こんな間違つた話はありませんよ。

東坡 よし、よし、では折角だから、ちよつと一筆書くとしようかな。

毛澤民 是非お願ひ申します。決して御迷惑になるやうなことはいたしません。

東坡 なあに君、知れたら知れたで仕方がないんだ、どうせ都には分らず屋が揃つて居るんだから。――

さう云ひながら悠々紙を展べて暫く沈吟し、やがて一首を書き下す。「湖光激澗晴偏好。山色空濛雨亦奇。若把西湖比西子。淡粧濃抹也相宜。」――書き終ると筆を投げ捨てて哄然と笑ふ。

東坡 出来た、出来た、あはははははは。

毛澤民 や、先生有り難う存じます。

東坡 あははははは、これでいい、これでいい、とうとうわしは禁を破つてしまつたぞ。さあ君、此れを持つて行き給へ。

毛澤民 (紙を受け取つて眺める) 成程、此れは七言絶句ですな。「湖光激澗晴^{いんげん}れば偏へに好し、山色空濛雨も亦奇なり、若し西湖を把つて西子に比ぶれば、淡粧濃抹也相^あ宜し。」――ああ先生有り難う存じます。「若し西湖を把つて西子に比ぶれば、」――ああ何と云ふ面白い比喩でせう、書記生等の傍に行きながら) 此れ、此れ、君たちも此れを見給へ、僕は斯う云ふ結構な物を書いて頂いたのだ。

書記生兩人、感に堪へたやうな調子で口々にその詩を吟咏する。

書記甲 湖光激澗晴るれば偏へに好し、山色空濛雨も亦奇なり、……………

書記乙 若し西湖を把つて西子に比ぶれば、淡粧濃抹也相宜し。

毛澤民 な、君たちにも此の詩の意味は分るだらう。西湖の景色を西施に比べてお歌ひになつたのだ。ああ、西湖と西施、――僕に取つてこんな思ひ出の深い詩はない！……先生有り難う存じます、此れで私も旅立つことが出来ます。此の詩を読んでさへ居れば、私の心はいつちも美しい杭州の天地を離れないでございませう。

少年登場、例の如く廣場を駈けて来る。

少年 書記さん、書記さん。

書記甲 これ、先生がおるでだぞ、静かにしなさい。

少年 でも又やつて来ましたぜ。

書記甲 又やつて来たか、どうも今日は不思議な日だな。

書記乙 今度は何處の藪者だね？

少年 ところが今度のは藪者ぢやないんです。太平街の吳小一と云ふ吳服屋が扇子屋の張二を訴へて来たんです。何でも大分面倒な事件のやうです。

書記甲 先生、どういたしませう。直ぐにお裁きを願へませうか。

東坡 左様さな、後でゆつくり飲み直すとして、ついでにそれも片付けてしまふかな。

書記乙 (少年に向ひ) では其の訴人を連れて来たらよからう。

少年 長まりました。

少年退場。

毛澤民 先生、お忙しいところを大變お邪魔いたしました。それでは此れでいよいよお別れいた

します。どうか先生もお體を御大切に、さうして一日も早く都へお歸りになれますよう、私も彼方でお待ち申して居ります。

東坡 有り難う。又いつ會へるやら分らないが、君も丈夫で暮らし給へ。

書記甲 毛澤民さん、御機嫌よろしう。

書記乙 お見送りに致さないで飛んだ失禮をいたしますが、御無事の御旅行をお祈と申します。

毛澤民 もうどうぞお構ひなく、それぢや君たちも御機嫌よろしう。

毛澤民、廣場へ降りて下手へ退場。

少年が吳小一と張二とを連れて来る。吳小一は張二の襟頭を捕へて引つ立てながら、大聲を喚き立てて居る。

吳 さあ、もうお役所へ来たからにや何と云つたつて勘辨はならねえぞ。是非とも此の始末を附けて貰はなきやならねえんだ。それが嫌なら手前を牢に打つ込んでやるからさう思へ。ほんたうに散々ツばら人を馬鹿にしやがつて、呆れ返つた太い野郎だ。……

少年 (吳小一を制しながら) おい、おい、さう君のやうにムカッ腹を立ててガミガミ怒鳴つても仕方がないよ。云ふ事があるならお役人の前で云ひ給へ。

書記甲 これ、これ、餘り騒々しいぞ、場所柄を辨へぬか。

少年 それ見ろ、叱られたぢやないか。だから僕の云はない事ぢやないんだ、——ええ申し上げます、呉服商人吳小一、並びに扇子賣り張二を連れて参りました。

書記乙 してお前たちは何をそんなに争つて居るのだ。

吳 まあお聞き下さいまし、わたくしは御城内太平街に呉服屋渡世をいたして居ります吳小一と申す者でございます。此の張二とはかねがね知り合ひの仲でございます。本年の春ついでに綾絹を二百五十反ばかり、代價二百兩に上ります品物を此の男に融通いたしましたところが、九月一杯と申す約束の期限が参りまして一向代金を拂ひませんのみか、何の彼のと口先ばかりうまい言を申しながら、もう此れで一と月以上も引つ張つて居るのでございます。お蔭で私は飛んだ災難を背負ひ込みまして、商賣の方が立ち行かない始末でございます。お役人様の前でございますが、ほんたうにこんな太い奴はございません、まるで騙りも同然の奴でございます。どうぞお取り調べの上お上のお力を持ちまして、何とか埒がきますようにお裁きをお願いいたします。

此の間張二は首を縮めて小さくなつて居る。その後少年が儼然と立つて、見張りをして居る。

書記甲 先生お聞きの通りの次第でございます、いかが取り計らひませう。

東坡 吳小一とやら、其の方の申し立てはしかと事實に相違ないか？

吳 はい、事實に相違ございません。

東坡 其の方はそれなら張二と云ふ者へ、今年の九月までの期限で綾絹を懸け賣りしたと申すのだな。

吳 左様でございます。

東坡 それに對して張二が代金を拂はぬと申すか？

吳 仰せの通りでございます。

東坡 これ張二とやら、其の方は唯今吳小一が申す通り、綾絹二百五十反を借り受けたに相違ないか？

張 はい、それはもう借り受けたに相違ございません。

東坡 吳小一はまだ代金を受け取らぬと申して居るが、たしかに左様かな？

張 はい、吳小一さんにはまことにお氣の毒なことで、面目ない仕儀ではございますが、わたくしもいろいろ商賣上の思はく違ひから手詰まりになりましたやうな譯でございます、濟

まないとはい思ひながらつい延び延びになつて居るのでございます。何も私は吳小一さんを欺さうと云ふ氣はございませんので、拂はうにも拂ふ金がございますから少し待つてくれるようにと頼んで居りますのに、どうしても承知してくれないのでございます。

東坡 しかし其の方は人から物を借りて置きながら、期限が切れても返さぬと云ふ法はないぞ。

張 それは重々私の方が悪いのでございます。しかし日頃の誼たよもございましてに金を返さないからとてやれ騙りだの詐欺だの言はれますのがいかにも心外でならないのでございます。どうぞお上のお慈悲を持ちまして、せめてもう三月なり半年なり待つてくれるようにお諭し願ふ譯には参りませんでせうか。商賣は時の運と云ふこともございまして、私も今でこそ斯うして困つては居りますもの、一時の急をお救ひ下さればきつと吳小一さんに迷惑はかけない積りで居ります。

吳 ええちよつと申し上げます。此の男は此の傳で人を欺くのでございますから、あんなことを申しましても決してお取り上げになつていきません。二百兩の金を今日中に耳を揃へてくれなければ、私は是が非でも承知する譯には参りません。

東坡 まあ待て、待て、其の方の申し立てはよく分つて居る。唯今張二を取り調べて居るのだ。

吳 はッ、恐れ入ります。

東坡 では張二に尋ねる、——其の何方が商賣上の手違ひをしたと申すのはどう云ふ譯だ？

其の事情を申し立てて見い。

張 はい、それは斯うでございます。——わたくしは吳小一さんから借り受けた綾絹で扇子を造りまして、夏をめぐりて一と儲けする積りでございました。ところが御承知でもございませうが、今年は思ひの外氣候が不順で、春の末から夏へかけて毎日のやうな雨天続き、おまけにうすら寒い日が多かつたものでございますから、目算がガラリと外れてまるで品物が賣れないのでございます。まあ其れや此れやで私もいろいろ吳小一さんに云ひ譯をして居るのでございますが、どうぞ今の場合をお察し下さいますして、何とかお慈悲深いお取りなが願へれば有り難う存じます。

東坡 成る程、其の方の申すことも尤ものやうだな。——して其の方は其の賣れ残りの扇子を如何いたしました？

吳 それはそつくり山のやうに積み上げて、店にしまつてあるのでございます。しかし私も、實は折角の仕込みを持ち腐れにするのが残念に思はれますし、あまり吳小一さんの催促が嚴

しうございますので、たとへ一本でも二本でも買つてくれる人はないかと存じまして、時候外れではございますが、此の頃少し陽氣が戻りましたのを幸ひに、毎日僅かつつ荷を擔いで賣り歩いて居るやうな始末でございます。

東坡 ほほう、それはナカナカ奇特な事だな。だが秋の扇を買ふやうな物好きな者は少なからう。どうだ、ちつとは商ひがあるか？

張 いえ、お察しの通りちつとも商ひはございません。たゞほんの氣休めの爲めに賣り歩いて居るだけでございます。今日も朝から町中を歩き廻つて見ましたが、まだ一本も賣れは致しません。

東坡 ふふん……今日も賣り歩いたと申すか？

張 左様でございます。

東坡 其の方其の荷物を何處に持つて居る？

張 唯今御門内にお預けして参りました。

東坡 それには扇子が何本ぐらあるな？

張 左様でございます、ちやうど此處に四十本持ち合せて居ります。

東坡 ふふん、四十本あるか。……これ吳小一。

吳 ははッ。

東坡 其の方は銀子二百兩を即座に受け取りさへすれば、何も異存はないのだらうな？

吳 仰せまでもございません。さうして頂けば此の上もないのでございます。

東坡 よし、よし、今直きに其の方の望み通りにしてつかはさう。

吳 へへッ、ではあの、その銀子をお立て替へ下さいますので？

東坡 まあどうするか見て居るがよい。——張二！

張 はい。

東坡 其の方のその四十本の扇子を残らず此れへ持つて参れ。

張 (不思議さうな顔つきで) はッ、畏まりました。

張二 急ぎ足で下手へ這入る、少年も其の跡について行く。

東坡 (書記甲に向ひ) それから君たちに頼みがあるんだ。君は一つ看板を書いてくれ給へ。

書記甲 あの、看板を書きますんで？

東坡 さうだよ。成るべく目立つやうに、大きな字で筆太に書いて貰ひたいな。

書記甲 何と書きますので？

東坡 左様さな、——「東坡先生御揮毫扇面大販賣」とやつて貰ふかな。さうして其の看板を役所の門前に立てかけるんだ。

書記甲 でも先生、そんなものを立てかけたら多勢人がやつてきて大變でございます。

東坡 いや構はん、構はん、多勢やつて来るほど都合がいいんだ。(書記乙に向ひ)それから君は大きな硯へ墨をドツサリ擦つてくれ給へ。

書記乙 ヘエ、承知いたしました。

甲 看板を書き、乙は墨を擦り始める。張二と少年が扇子を抱へて来る。

張 ええ申し上げます、扇子を持つて参りました。

東坡 それでちやうど四十本か？

張 左様でございます。

東坡 ところで張二、わしが其の扇子へ何か一と筆づつ書いて遣はすから、其の方それを持つて此の役所の門前で市を開くがいい。大丈夫賣れることは請け合ひだぞ。

張 はい、はい、それはもう先生に御揮毫が願へますれば、こんな結構なことはございません。

きつと扇子に羽根が生えて飛ぶやうに賣れるでございます。

東坡 あははははは、賣れたら其の方は間違ひなく呉小一に金を返すであらうな。

張 そりや勿論でございますが、かりに一本が五兩としましても四十本で二百兩、若しそれ以上に賣れました場合には、残りの金はどういたしませう。

東坡 それはその方の利得になるのだ、遠慮なく取つて置くがよい。

張 (嬉しさの餘り茫然として) あ、ありがたう存じます。

呉 おい張二さん、お前は飛んだ運のいい男だぜ。五兩としても二百兩、七兩として二百八十兩、まあ己の考へぢやあ三百兩や四百兩はまたたくうちだ。

張 そんなに儲かつたら己はどうしたらいいだらう？ 借金が返せて、資本が出来て、曲つた運を取り返して、まるで嘘のやうな話だな。

呉 先生、まことに有り難う存じます。張二ばかりか私も大助かりでございます。

張 ほんたうに何から何まで行き届いたお取り計らひ、御恩は一生忘れはいたしませぬ。此で私はやう／＼浮び上れます。

東坡 あははははは、(書記乙に向ひ)さあ墨が擦れたら扇子を此處へ持つて來なさい。

書記乙 畏りました、(扇子を東坡の机に運びながら) ですが先生、これだけの扇子をお書きになるのは大變でございますな。

東坡 なあに、どうせ今日は禁を破つたついでだからな、四十本や五十本は何でもないよ。まあちよつと見て居給へ。

其の間に書記甲は看板を書き終り、乙と共に東坡の机へ来て左右から覗き込む。東坡扇子を取り上げて片端から書き始め、忽ちのうちに二三本出来上る。

書記乙 ほほう！ 早速出来ましたな、此れは五言絶句ですな。

書記甲 成る程、成る程、いい文句ですなあ！

書記乙 や、今度は繪だぞ。

書記甲 ははあ、山水でございますな。先生は繪の方もなか／＼御器用で居らつしやいます。

書記乙 それ、又一つ出来たぞ。

書記甲 今度は七言絶句かな。

書記乙 今度は又繪だ。

書記甲 此れは蘭だね。

書記乙 うん、さうだ／＼、そら、もう蘭が出来上つちやつた。

書記甲 今度は竹だ。

書記乙 うんさうだ、竹だ／＼。

東坡 此の鹽梅ちや造作はないぞ、あははははは。

階下の三人はもごかしさうに伸び上つて居る。書記生等夢中になつて見惚れながら頼りに感嘆の叫びを近づける。

舞臺廻る。

第二幕

役所の門前。——「東坡先生御揮毫扇面大販賣」の看板が掲げられ、其の前に町の群集がうよよとして居る。張二と吳小一とが一段高い所に登つて、代る代る聲を絞りながらせり賣りの最中である。段の上には銀貨が山のやうに積み上げられ、往來にもごころごころにこぼれ落ちて散亂して居る。少年が時々書き上げた扇子を五六本づつ門内から運んで來たり、銀貨を拾つて整理してやつたりして居る。

張 扇子をかざしながら、さあ、いくら、いくら！
吳 さあ早くお買ひなさい、早く買はないとなくなつちまふぞ！
張 もうたつた十五本だ。
吳 四十本のうちがもうたつた十五本だ！ 根ッ切り葉ッ切り此れッ切りだ。
張 いくら、いくら！
吳 さあ早いところ早いところ！
群集の一 十五兩！
張 それ十五兩！
群集の二 十六兩！
張 それ十六兩！
吳 もう一と息！
群集の三 十七兩！
張 それ十七兩！
群集の四 十八兩！

群集の五 十九兩！

吳 それ十九兩だ！ もう一と息、もう一と息！

群集の六 二十兩、二十兩！

張 それ二十兩！——よし！ 二十兩で賣つた〜。

群集先を争つて扇子を買ふ。

此の時門内から毛澤民が旅装を整へて驢馬に跨りつつ出て來り、混雜の様子を面白さうに眺めて居たが、やがて張二に尋れる。

毛澤民 これ、これ、品物は賣り切れになつたかな？

張 へえ、此れですつかり賣り切れでございます。

毛澤民 わしも一本買ひたいと思ふのだが、もう一本もないか？

張 まことにお氣の毒様で、もう一本もございません。

毛澤民 其處に一本残つて居るのは、それは何だ。

張 はい、これはあの、…… 實は私も先生のお蔭を待ちまして飛んだ大金儲けを致しましたので、せめて此の一本だけは、家の寶として取つて置きたいと存じますのでございます。

毛澤民 成る程、それは殊勝な心がけだ。……しかしどうだな、それを私に譲つてくれる氣はないかな？

張 折角でございますが、どうぞこれだけはお見逃し下さいまし。わたくし共はあなたのやうな御身分のある方とは違ひまして、いくら先生に書いて頂きたいと存じましても、此の後二度と斯う云ふ物が手に入る時はないのでございます。

毛澤民 いやいや、それは私と同じことだ。わしは今日から先生のお側を離れて、遠い旅に出なければならん身の上なのだ。就いてはさう云ふ珍しい扇子を、再び買ふ折はないのだから、勝手ながら私に譲つてはくれまいかの？

張 さう仰しやれば御尤もではございますが、私に取りましても此れは大事な品物でございますから、……

毛澤民 では斯ういたさう、それを私が五十兩で買つて上げよう。

張 ナニ、あの五十兩で？

毛澤民 さうだ、五十兩で買つて上げる。

張 そりやほんたうでございますか？

毛澤民 あはははは、其の方の家の寶を買はうと云ふのに、五十兩でも高くはあるまい。

張 よろしうございます、それほどまでに仰しやるものをお断りするのも冥利が悪うございませう、ではたしかに五十兩でお賣り申しませう。

毛澤民 おう賣つてくれると申すか、それは忝い！ (驢馬に積んだ荷物の中から銀貨を取り出す)

さあ五十兩、よく改めて受け取つてくれ。

張 へえ、へえ、たしかに。——此れは有り難う存じます。

此の間に群集は手に手に扇を打ち開いて眺めつつ次第に退場。少年と吳小一とは跡に散らばつた銀貨を寄せ集めて勘定して居る。毛澤民は扇子を取り、馬上に其れを打ち眺めつつ暫く無言の體。

吳 張二さん、金の勘定はすつかり済んだぜ。此處に五百三十兩、それから其の五十兩が這入るとして縮めて五百八十兩、儲けたも儲けたも何と素晴らしい儲けぢやないか。

少年 畜生！ ほんとに此の扇子屋はうまい事をしやがったぞ！ こんなに澤山の金を見たなあ僕は生れて始めてだ。

張 あんまり嬉しくつて己は何だかほんやりしちやつた、こんなに儲けて罰が中りあしないか

な。

吳 あははははは、さあ張二さん、約束の金を返しておくれ。

張 いいとも、いいとも、もう斯うなりや豪氣なもんだ。それ二百兩とな。それから利息に二十兩附けて上げよう。

少年 おい、おい、僕には一文もくれないのかい？ 僕は半分手傳つてやつたぜ。

張 うんそうだつけ、お前さんにもお禮をしなけりや悪かつたな、それ、十兩上げる。

少年 やあ、ゑらく奮發したぞ、此れだけ貰やあ文句はないや。

少年小躍りしながら銀貨を受け取つて何度も勘定をした後、看板を擔いで門内に入る。張二

吳小一は金の袋を重たさうに肩に擔いで上手へ遣入る。

毛澤民 (依然として扇子を視つめつつほゞ溜息をつく) あああ、此れは西湖の斷橋の圖だ。繪は

見事だが斷橋とは心細い、大方縁が切れると云ふ謎だらうて、……

さう云ひながら悲しい思ひ入れで扇子を懐ろに收め、名残り惜しさうに後を振り返りつつ驢馬を進めて下手へ行つてしまふ。鈴の音が長く聞える。

第三幕

湖上の夜。——見渡す限り縹渺たる水面、上手に近く、こんもりとした孤山の翠巒が見え、下手の方には遙かに杭州城の町の灯がチラチラして居る。折々何處やらで微かな笛の音が聞える。美しい月の光を浴びて一般の畫舫が湖心に浮かんで居る。船中には蘇東坡と妓生の朝雲とが羞し向ひて微吟低酌の様。

朝雲 先生、あれを御覽なさいまし、——あのまんなな月の影が、ちやうど今雷峯塔の上にかかつて参りました。ほんとにまあ、今夜は何と云ふいいお月夜でせう。

東坡 ああ好い月だな、今日は晝間から飲み續けたが、今宵の酒はまた格別だ。斯うして居ると私は何も彼も忘れてしまふ。此れですつかり晝間の疲れが抜けたやうだ。

朝雲 おや何處かで笛の音が聞えるやうでございますね、斯う云ふ晩にあの音色を聞いて居るとあたし何だか悲しくなつて参りますわ。

東坡 しかしそなたがさう沈んで居ては、折角の酒が面白くない。——どれ一つ元氣を出して琵琶でも弾いてくれ、わしが歌を唄つて聞かさう。

朝雲 ではあのいつもの、先生のお好きな西湖の歌をお聞かせなすつて下さいまし。

朝雲琵琶を把つて調子を合はせる、東坡は眼を閉じ空を仰ぎつつ左の歌詞をうたふ。

東坡の唄ふ歌――

碧澄々として、凝たり一萬頃、徹底琉璃

青娜々として、列なる三百面、交翡翠を加ふ

春風吹いて過ぐれば、艶桃穠李描くが如く

夏日照らし来れば、綠蓋紅蓮畫に似たり

秋雲掩映すれば、滿籬の嫩菊金を集め

冬雪分飛すれば、孤嶼の寒梅玉を破る

曉霞は連絡す三天竺

暮靄は横堆す九里松

風は呼猿洞口に生じ

雨は龍井山頭に飛來す

簪花人は逐ふ、淨慈來訪の友

客は投ず靈隠寺

此の歌の間に笛の音が止む。朝雲は琵琶を置いて杯を東坡にさす。

朝雲 ああ有り難うございました、今のお歌で気がせい／＼しましたわ。

東坡 あはははは、そなたに感心されるほどの藝でもないが、此の湖の月を肴に酒を飲んで、好きな歌でも唄つて居れば私は世の中に不足はないのだ。なあ朝雲、そなたもさうは思はんかな。

朝雲 でもあたし、先生のやうな御立派な方がこんな田舎へ流されておるでになるなんて、つくづくお氣の毒だと存じますの。いづれ其のうち都へお歸りになるんぢやなくつて？

東坡 なあに、都へ歸るなんて、私は近頃そんなことを夢にも考へちや居ないのだ。事に依つたら一生流人で終るかも知れん。

朝雲 だけど、都の人たちはなぜ先生のやうな方を流し者なぞにしたんでせう、ほんとにひどい人たちですわね。

東坡 さう云つてくれるのは有り難いが、わしは此の通りの酒飲みで、暇があれば詩を作つてぶら／＼遊んで居るより外に能のない人間だから、結局田舎の役人が相當して居るんだよ。

暮には雨となることもありさうなものだのに、まだそなたには楚の襄王が見附からぬかな。

朝雲 朝の雲も暮の雨も、何處と云ふあてもく風に吹き送られて行くばかり、いつになつたら襄王の夢に會へるのやら、行く末のことを考へると、あたしほんたうに心細くなつて來ますわ。

東坡 成る程な、そなたほどの藝者でも矢張り苦勞はあると見える。そなたもわしと同じやうにあまり氣位を高くすると、どうしたつて獨りほづちにならなきならない。つまりはまあ、自分で苦勞を求めるやうなことになるんだ。

朝雲 でもあたし、意地ツ張りだから駄目なんですの。……そりやあたしのやうな女でも、何とか彼とか云つて下さる方はあるんですけど、あたしにだつて少しは考へがあるんですもの、いくらお金を積まれたつて氣に入らない人に身を任せようとは思ひませんわ。

東坡 だが、そなたに思ひを寄せる者は一人や二人ではなからうに、氣に入つた者がたまにはありさうなもんぢやないか？

朝雲 たまに氣に入つた人があれば、賤しい稼業の女などを相手にしては下さいませんし、相手になつてくれる人は道樂者の商人ばかりですし、あたし此頃は自分で自分の身がしみじみ嫌になりましたわ。……ねえ先生、藝者なんてほんとに詰まらないもんですわね。……

この時また笛の音が聞え、だんだんに舞臺へ近づいて來る。

笛の音は靜かな波に揺られて悠々たる圓を描きながら、極めて緩漫に、ケルリミ一ミ周りする。

其の間兩人無言。

笛の音いよいよ近づき、上手孤山の鳥蔭より一般の笛の音が現はれたまま、其處にちつと停

まつて居る。同時にパツタリと笛の音が止む。

月は天心にかゝり、皎々たる光が一ミ入その魅力を増す。

東坡 ………朝雲。

朝雲 はい。

東坡 そなたはわしの心をよく知つて居てくれる。數多い此の土地の藝者の中で、わしの心持ちが分つてくれるのはそなたばかりだ。……

朝雲 ………

東坡 そなたは自分で世を狭める不運な藝者、わしは世に容れられない不運な詩人、そなたはわしを哀れな男とは思つてくれぬか。

朝雲 先生こそあたしを可哀さうだと思し召して下さいまし。……

東坡 朝雲、わしの心を察してくれ。

朝雲 冥加に餘る先生のお言葉。……うれしうございます。

東坡茫然として女の手を把る。朝雲も言葉なく伏目がちになつて涙ぐむ。

やや暫くして島蔭の船中より琵琶の音と共に悲痛な女の聲で歌が聞える。歌の途中から東坡と朝雲とは其の船の方を眺めやりつつ耳を澄ます。

女の唄ふ歌——

涙は欄干を濡はし花は露を着く

愁は眉に到つて峰の碧聚まる

此の恨み平分して取れば

更に言語なうして空しく相窺ふ二細雨

残雲意緒なし、朝々暮々

今夜山深きところ

断魂潮に分付して回り去らん

東坡 (愕然として) や、や、あの歌をうたふのは誰だ、あの船を呼べ。

朝雲 (船の方を手招きしながら) もし、もし、そちらに居らつしやるのはどなた?

東坡 わしは蘇東坡だ、その船の者に用があるぞ。

朝雲 どうぞ其の船を寄せて頂戴。——

船無言のまま此方へ漕いで来る。船中には年寄りの船頭と、妓生二人が乗つて居る。妓生の一人は群芳、一人は琴操、歌を唄つたのは前者で、琵琶を弾いたのは後者である、船が近づくと、二人とも羞かしさうに畏まつてさし俯向いて居る。

朝雲 あら群芳さんに琴操さんだわ。

兩人とも猶下を向いて黙つて居る。船は東坡の蕭筋の舷側へ舳をつける。

東坡 しでそなたたちは、今頃何をして居たのだ?

琴操 はい、あまり美しいお月夜なので、月見がてらに船を出したのでございます。

東坡 さうして今の歌の主は、琴操、そなたか?

琴操 いいえ、……

東坡 では群芳が唄つたのか?

群芳琴操と顔を見合せて何やら躊躇する様子。

東坡 これ、これ、隠すには及ばんぞ。群芳 そなたが唄つたのだな。

群芳 ……はい、先生が居らつしやるとも知らずに、飛んだものをお耳に入れまして、お羞かしう存じます。

東坡 いや、いや、羞かしいどころではない。詞ことばと云ひ、調しらべと云ひ、わしはしみじみ身に沁みて聞いて居つたぞ。あれは離別の悲しみを歌つたものやうに思はれるが、それにしてもあの心にくい歌の文句を作つた人の名が知りたい。そなたにあれを教へたのは誰だ？

群芳 (モヤモヤしながら) はい、あの、どうぞ其の人の名前だけは、……

東坡 云へぬと申すのか。

群芳 はい、お免しなすつて下さいまし。

東坡 ほほう、さう云はれると猶更わしは聞きたくなる。あれほどの歌を作れるやうな風流な心得のある者が、憚りながらわしを除いては此の土地に居さうもないと思はれるに、さてさて世間には隠れた才子が居るものだな。これ群芳、隠し立てをするには及ばん、是非その人の名を聞かしてくれ。

群芳 でもあの、決して人に云つてはならぬと、堅く止められて居るのでございます。

東坡 聞けば聞くほど床しい心根の人と見える。それほどの人を知らずに居たとわしこそほんたうに恥かしいわ。これ悪いやうには計らはぬから、何卒その人の名を明かしてくれ。

朝雲 もし、群芳さん、先生があれほど仰しやるのに、なぜそんなにお隠しなさるの？ 打ち明けて下さつてもよくはなかつて？

琴操 ほんたうにさうよ、あたしあなたの心持ちはよく分つて居てよ、だけど、そりやいろいろ打ち明けられない譯もおありでせうけれど、もう斯うなつたら、詰まらない遠慮なんかさらない方がいと思ふわ。

東坡 何か込み入つた譯があるなら、それもついでに話して聞かすがいい。及ばずながら私力になつて上げよう。

琴操 ね、群芳さん、ああ仰しやるのに隠し立てをなすつちや却つて損だわ、いつそ先生にお話ししちやつた方がいいわ、ね、分つたでせう？ (群芳袂に面を掩うてさめさめと泣き出す) あら、あなたどうなすつたの？

朝雲 まあ、それほど思ひ詰めたことがあるなら、猶更ぢやありませんか。ね、後生だから聞か

して頂戴。

東坡 さ、どうか聞かしてくれ、さう泣いて居ては話が分らぬ。あの歌を作つたのは何處の才子だ？ 定めしそなたの戀人であらうが、それは其の人と辛い別れをしたとでも云ふのか？

さあ、早く云ふがいいぞ。

群芳 はい、……あの歌を作つた人は、毛澤民さまでございます、……

東坡 ナニ、毛澤民？

群芳 どうぞお察し下さいまし、……

群芳聲をあげて激しく泣き崩れる。東坡は朝雲を顔を見合せて驚く。琴操は群芳の肩を撫でて勢はつて居る。

東坡 ではあの毛澤民には、そなたと云ふものがあつたのか、わしは今日まで其れを夢にも知らずに居たわい。……だがさう云へば、此の間から何となく塞いで居るやうだつたが、それならさうとなぜ打ち明けてはくれななんだかな。

群芳 でも二人の間柄は私事、公けの御用には換へられぬと仰しやつてゆふべは散々泣き明かしてあの別離の歌をおよみになつたのでございます。

東坡 さうとも知らずに私はあの男を都へ立たせてしまつたが、心のうちでは嘆恨んで居ただらう。

群芳 いえ、いえ、ちつとも恨んでなんぞ居らつしやりや致しません。先生のやうな名高い詩人とたとへ一年でもを並べて暮らせたのは此の上もない名譽だと、昨夜もさう仰しやつて居らつしやいました。

東坡 そんなに慕つて居てくれたのに、わしは愚かにもあの男を少しも認めてやらなかつた……

……成る程此の蘇東坡は名高い詩人かも知れぬ、しかし毛澤民は世に知られない氣の毒な詩人だつたのだ。わしはきつと、今夜の歌をきかずに居たら、いつ迄もあの男をただの役人と思つて居ただらう。それほどの風流才子とは知らずに済んでしまつただらう。ああ、わしは今更毛澤民に合せる顔がないやうな氣がする。……

朝雲 ねえ、先生、あたし群芳さんがお可哀さうでなりませんわ。毛澤民さんだつて、今のお歌にあるやうに、可愛い人を振り捨てていらつしやるのはどんなにかお辛いことでせうに、いつそ喚び返して上げる譯には行きませんか？

東坡 おお、そなたはよいところへ氣がついてくれた。世の中には役人になる者はいくらもある、

しかし詩人と云はれる者はめつたにないのだ。毛澤民はわしの知己だつたのに、此の美しい湖畔の町を追ひやつて殺風景な都の空へ立たせたのは、ほんたうに私の誤りだつた。わしも群芳と同じやうにあの男が戀しくなつたわい。

朝雲 今日夕がたお立ちになつたばかりですから、まだ遠くへは入らつしやりますまい。直ぐに人をおやりになれば、きつと明日のうちに間に合ひますわ。

東坡 これ、群芳、もう泣くことはないぞ、今夜のうちに使を出して必ず喚び戻してつかはさう。琴操 まあよかつたこと！ あたし、あなたがたの喜ぶ顔が早く見たいわ。嘸うれしいでせうねえ。

群芳はただ嬉し涙にかきくれてゐる。

東坡 さあ、もう泣くのは止せ止せ、機嫌を直して、一つ前祝に私の杯を受けてくれ。

朝雲 此れと云ふのも毛澤民さんの歌のお蔭、あたしあの歌をもう一度聞かして頂きたいわ。

東坡 うんさうだ、それがいい、それがいい、わしもあの歌を聞いて毛澤民の風流にあやかりたいぞ。

琴操 (琵琶の調子を合はせながら) さあ群芳さん、戀しい人を偲ぶすがに、もう一度あれをお

唄ひなさいな、明日になれば悲しい歌もみんな喜びの種になるのよ。

群芳琵琶の音に催されていつさはなしに涙の顔を擡げ、惹き入れられるやうになつて、最初は

微かに、次第次第に聲を張りつつうたふ。

群芳の唄ふ歌

涙は欄干を濡ほし花ば露を着く。

春
の
海
邊
（三幕）

人物

三枝 春雄

工學士

同 梅子

春雄の妻

同 静子

春雄の長女

原田千代子

春雄の妹、或る銀行家の妻

河村雪子

某省某局長の夫人、梅の實母

吉川 清

文學士、某雜誌記者

まつ

下女

時 三月の末の或る一日、午後一時頃より夜の十一時頃までの出来事

所 相州鎌倉長谷の海岸

春の海邊

第一幕

河村家別荘の一室、——舞臺の下手は壁、上手と正面の奥は障子。兩方の障子を明ける。外の縁側に硝子障子が嵌まつて、其の向うに庭が見える。ところどころに背の低い小松が植つて居る。庭の後ろは砂山に續き、折々穏かな波の音が聞える。

此の座敷は目下當地に逗留する三枝夫婦の居間に充てられて居るのだが、一年程前に新築したもので、非常に日あたりのいい、陽氣な間取りになつて居る。室内下手の壁に添うて、書棚の附いた、大型のライチング・デスク、其の前に椅子。デスクの上に華美な置時計、花瓶などを置く。部屋の中央に桐の團丸の火鉢、其の左右にメリンス友禪のふっくらした座蒲團、上手前方の障子際に桑の鏡臺、其處にも同じやうな座蒲團。正面奥の縁側に籐の長椅子。——凡べていかにも若い夫婦の生活を偲ばせるやうな、花やかな調度装飾的に配置してある。

第一節

三枝春雄、色の白い、濃い髪を生やした、三十歳前後の神經質らしい男、獨り椅子に腰掛けて、デスクに凭れながら、何事か考へに沈める様子。

上手の障子は締まつて居るが、正面の方は左右に明け放たれて、暖かい春の日光が庭の方から硝子越しに室内へ射し込む。背景の砂山の向うには、午後一時頃の空が、青々とのどかに霞んで見える。

やがて、春雄は立ち上つて、上手の鏡臺の傍へすわり、其處に映つて居る自分の顔をつくつく眺め始める。暫くすると、下手の方から雪子と静子が縁側へ現はれる。雪子は四十七八歳のでつぶりと太つた、人の好きさうな、快活な夫人、静子は六七歳の可愛らしい娘で、祖母に手を引かれて居る。

静子 (雪子と共に春雄の後ろへ歩み寄る) お祖母様、お父さんはお化粧をして居らつしやるのよ。

雪子 ほんとにをかしなお父様だ事。——お前のお父様は、暇さへあれば毎日鏡を見て居るんだよ。

静子 (父の襟頭に抱き付て、自分も一緒に鏡を覗き込む) お父さん、あたしお白粉を着けて上げませうか。

春雄 いやお白粉は眞つ平だ。あとでお母さんに着けてやるがいよ。

雪子 春雄さん、そんなに鏡ばかり視詰めて居てどうするのさ。此の頃は誰だつてあなたを病人だと思ふ者はありませんよ。第一顔に赤味がさして来たからね。

春雄 しかし矢つ張り日に一度つつ鏡を見ないと、どうも安心しませんよ。それに何ですな、かう肉が附いて、血色が好くなると、鏡に向つても我ながら非常に愉快です。お蔭様で、今度こそはすつかり丈夫になつたらしい。

雪子 丈夫になつてくれなければ困りますよ。——全體あなたは神経病みだから、それで尙更病氣に取り憑かれるんだね。毎日毎日鏡を視詰めて、自分の血色を氣にする人があるもんですか。

春雄 なあに、別に氣にして居る譯ぢやありません。一體僕は昔から鏡を見るのが好きなんです。退屈すると鏡を見て居るのが一番面白うござんす。

雪子 妙なお父様だねえ静ちゃん。

静子 お父さんのお洒落やあい。

春雄 何だと、お父さんの事をお洒落だと云つたな。こいつめ、こいつめ。(こ云ひながら、静子を両手に抱き上げて立つ。静子からからと樂しげに笑ふ)

雪子 (縁側の寢臺に腰かけて戸外を眺める) ほんとに今日は好いお天氣だ。春雄さんちつと子供を連れて散歩でもしたらいいぢやないか。その内に梅子も歸つて来るだらう。

春雄 (デスクの前の椅子に腰掛け、膝の上に静子を載せて揺す振つて居る) さあ、まだちよいと歸りますまい。今日は少し面倒な用事があるんですから。

雪子 どんな用事?

春雄 いえ、實は赤坂邊へ借家を捜しに行つたんです。

雪子 まあ、氣が早いつたらないね。まだ半月は此處に居たつていぢやないか。

春雄 僕はどつちでもいゝんですが、梅子が馬鹿に東京へ歸りたがつて居るんです。もう鎌倉なんか飽き飽きして、嫌だ嫌だつて云ふんです。それにいつまで別荘を拜借して居るのも心苦しいやうですから、……

雪子 そんな事があるもんですか、どうせ別荘に明いて居るんだし、あなたにしたつて、一日も長く海岸に居た方が、體の爲にいくらいいか判りやしない。あの兒が歸つて來たら、私からよくさう云つてやりませう。

春雄 しかしおつ母さん、僕も長々御心配を掛けましたが、もう今度こそ大丈夫です。此れから

一番奮發して、今迄の取り返へしをしなくつちや。仕様がありません。何しろ足掛け三年と云ふもの、まるで棒に振つちやつたんですからなあ。——お父さんに對してもいろいろ厄介になるばかりで、全く申譯がありませんよ。

雪子 けれどもあなたが此頃の様達者になつて下されば、それが何よりの話さ。どんなにえらい人だつて病氣には勝てないんだから、過ぎ去つた事は仕様がな。親父さんも、來月中には必ず役所の方へお世話をすると云つて居ましたから、いづれ近々に何とか沙汰があるでせう。

春雄 何卒何分お願い申します。

雪子 其の方の心配は要らないから、此の上共に體を大事にして下さい。病氣といふものは直り際が肝腎ですよ。——ほんといつまらない遠慮をせずと、口がきまるまで、此所に居たらよささうなものだね。

春雄 それぢやおつ母さんから、梅子にお話しなすつて下さい。僕は何方でも彼れの意見通りになるんです。尤も先生はなかなか剛情ですから。

雪子 いくら強情だつて、御亭主の體の爲めなら爲方がないやね。

春雄 御亭主の體は愚か、自分の體が危なくなつても云ひ出した事はめつたに後へ引きませんから

な。それに鎌倉が嫌で嫌で溜らなくなつた所ですから、恐らくお母さんが何と仰つても、承知しますまい、どうでも好きなやうにさせて置くのが一番です。

雪子 あれは子供の時から我が儘な娘でしたけれど、あなたもあまり叱言を云はな過ぎるんだよ。たまにはウンと云つてやる方がいゝんです。

春雄 けれどもおつ母さんの前ですが、僕は彼れの我が儘に就いて一度も腹の立つた事がありませんよ。

雪子 あなたがそれぢや困つて了ふね。——もとはと云へば私達の育て方が悪いんだけれど……

春雄 (頗る眞面目な調子) なに悪い事があるもんですか。女は我が儘に限ります。大人しい女は氣の抜けたビール見たいなもんです。若しも梅子があゝ云ふ性質でなかつたら、僕は結婚なんかしやしません。

雪子 おほゝゝゝゝ、(嬉しそうに笑ふ) あなたも餘つ程變り者だね。

春雄 いゝえ、本當の話です。梅子をあゝ云ふ風に育て、下すつた事に就いて、僕はおつ母さんにお禮を申します。

雪子 まあ冗談は兎に角として、それ程に思つて居て下されば、あの兒もほんたうに仕合はせてす。

春雄 さうして僕も仕合せです。唯不仕合せだつたのは、僕が長い間大病ひをした事です。結婚してから一年と立たぬ間に病み付いて、寝たり起きたりして居たんですから、僕は殆んど結婚の楽しみ、家庭の楽しみと云ふ者を味ふ暇がなかつたんです。丁度この子が生れた時分には、四十度近くの熱に浮されて、床の中で呻つて居た最中でしたからなあ。(静子を撫でてやりながら) 僕は到底助からないとあきらめて居たんです。かうして此の子を膝の上に載せて可愛がる事が出来ようとは、夢にも思つて居ませんでした。

静子 昂奮したる父の顔を不審さうに見上げて居る。

春雄 ですから僕はこんな大きな子供がありながら、今迄全く、父としての愛情も、夫としての幸福も経験する事が出来なかつたんです。僕一人が病身なばかりに罪のない妻子に迄氣の毒な思ひをさせて了ひました。

雪子 けれどもあなたはまだ若いんだから、いくらでも取り返へしが附きますよ。一體大學を卒業したのが、あんまり早過ぎましたからね。なあにあなた三十と云へば仕事をするのは此れ

からさ。

春雄 仕事ばかりぢやない、此れから凡べて新規時き直しにやるんです。此の子の爲めにも、梅子の爲めにも、立派な父親となり夫となつて見せるんです。——何だか僕は結婚當時の心持ちと、昨今の心持ちと全く同じやうな氣がしますよ。病氣が直つて、斯う人間並の體になつて見ると、凡べての事が珍しくて愉快ですな。早く職業に有り附いて、目覺ましい活動をして見たい。早く親子三人で新世帯を持つて見たい……此の頃はそんな妄想にばかり耽つて居ます。

第二節

原田千代子、松林の奥より庭上へ歩み来る。二十三四歳の、小柄の太りたる夫人、庇髪に結つた、愛らしくて而も惻巧さうな顔の容貌。海岸の散歩から歸りたる所らしく、羽織も纏はず、足袋も穿かず、綿鎧仙の綿入を着て麻裏草履を穿いて居る。

千代子 (縁側の硝子障子を明けて、室内へ上りながら) まあ今日は海が靜かでございますこと、——

—まだ嫂さんはお歸りなりませんの？

雪子 え、まだ歸つて來ないですよ。今春雄さんから聞いたんですが、赤坂へ家を捜しに行つたんですと。

千代子 おや、それぢや兄さん、もう東京へお引越しなさるの？

春雄 うん、さうしようかと思つてるんだ。

雪子 何にしても引越すにはまだ早過ぎると思ふんですがねえ。もうあと一と月なりと、此處で養生をするやうに、千代子さんからも兄さんにすゝめて下さいませよ。

千代子 ほんとに左様でございますね。兄さん、折角おつ母さんがあゝ仰つしやるんだから、もう少し御厄介におんなさいいな。

春雄 僕はそれでもいゝんだが——(急に言葉を濁らせる) しかし。今のうちから捜して置かないと、なかなか急にいゝ家が見付からないのだ。どうだいお前の近所に好ささうな借家はなにかい。

千代子 あたしの近所なんか場末だから仕様がないわ。赤坂邊なら此方様の御本宅も近いし、都合がいゝぢやありませんか。

春雄 けれども場末の方は空氣がいゝからな。

千代子 空氣ばかり好くつても、喰べ物がまづくつて、買ひ物が不便で、ほんとに仕様がないわ。第一隣り近處が淋しいから、夜なんぞ女は獨り歩きが出來やしないわ。あたしは此の通りお轉婆だから、一向平氣ですけど、それでも宅の歸りが遅い時なんか、妙に心細くなるんですもの。兄さんにはよくつても嫂さんがとても辛抱なさらないわ。

雪子 ほんとに千代子さんは苦勞なすつただけあつて感心だねえ。梅子と來たら、いくつになつても娘のやうな氣で居るんだから、困つて了ふ。

千代子 (雪子の言葉を聞かぬ振りして、春雄の膝に抱かれた静子の手を取る) まあ静子さん、さつきからよく大人しくして居らつしやるのね。又叔母さんと一緒に遊ばなくつて？

静子 え、遊びませう。

千代子 今日はお母さんに置いて、き堀にされちまつたのね。

静子 あたしお母様よりお叔母様の方が好き。

千代子 あらそんな事を有仰ると、もうお母様がお土産も何にも買つて來て上げませんと！
春雄 それぢやお前が内中で一番好きな人は誰だい？

千代子 さあ、誰でせう？ お祖母様か知ら、それともお父様か知ら。

静子 あのね、あたしの一番好きなのはお祖母様！

春雄 それから？

静子 それから乳母！

千代子 それから？

静子 それから、お父様と叔母様と同じぐらゐ好きなの。

千代子 それから誰方！

静子 それからお母様。

春雄 お前はお父様よりお母様の方が恐いんだな。

静子 だつてお母様は直きにあたしを叱るんですもの。

春雄 何と云つて叱るんだい。

静子 「うるさいから、彼方へお出で」ツて仰つしやるの。

春雄 よし、よし、今にお母様が歸つて來たら、云附けてやるぞ。

千代子 噓よ、静子さん、お父様は噓つきよ。(春雄の膝より静子を抱き取る) ——あなたそんな

に叔母様がお好きなら、此れからちよいちよい叔母さんの所へ遊びに來て頂戴な。

静子 叔母さんのお内は何處なの？

千代子 澁谷と云ふ所なの。叔母さんは二三日の中に東京へ歸りますから、さうしたら今度泊り

がけで遊びに來て頂戴ね。内にも静子さんの妹のやうな、小ひさな、子供が居りますのよ。

雪子 暫くお目にかゝりませんが、噓大きくおなりでせうねえ。

千代子 はあ、漸く手足が自由になつたものですから、此の頃は危くつて目が放されません。

雪子 たしか三つにおんななすつたんですね。今度入らつしやる時には、是非連れてお出でなさいましよ。

千代子 はあ、有難うございます。

雪子 どれ、あんまり退屈だから、少し運動して來ませうか知ら。(立ち上る) 静子や、お祖母様と一緒にいかないか。

千代子 さあ行つて入らツしやいませ。(静子を縁側へ下ろす)

雪子 さう云へばこんなにお天気なのに、今日はいつもの彼の方がお見えにならないね。ほら、何とか云つたつけね春雄さん。

春雄 誰の事です。

雪子 あなたのお友達で、つひ此近所に居らッしやる方さ。

春雄 吉川ですか。

雪子 あッ、さうさう、吉川さんさ。彼の方が来ると、話が面白いので、つひつひ時間を潰して了ふんだけれど……

雪子、静子の手を曳きながら、縁側修ひに下手へ退場。

第三節

千代子 (雪子と静子の立ち去るのを待つて、徐ろに火鉢の右側の坐蒲團に坐る) 兄さん、あたしは明日あたり東京へ歸らうと思ひますの。

春雄 さうか、一向お構ひしないが、差支へがなかつたらもつと遊んで行くがい。 (千代子と二人になるこ、急にうかぬらしい眼付きをして、椅子に凭ながら頼りにモヤモヤする)

千代子 えゝ有りがと。……宅はあの通り香氣ですから別に何とも云ひませんけれど、まさか子供を打つ放つて、あんまり長く遊んで居る譯にも行かないから、……

春雄 それもさうだな、原田君にも何れ東京で會ふだらうが。お前から宜しく云つといてくれ。

(モヤモヤする舉動がだんだん顯著になつて、遂に居溜らぬやうに椅子を立ち上る) どれ、僕も少し散歩に行つて来ようかな。

千代子 まあ兄さん、(屹さ兄を見詰める) 話があるんですから、暫く此處に居て下さい。

春雄 何だい。(顔の色變る。不承不精に再び椅子に腰を下ろす)

千代子 あたしは兄さんに云ひたい事が山のやうにあるんです。……ねえ兄さん、あたしが此の河村様の別荘へ来てから、もう一週間になるけれど、兄さんは一度だつてあたしとゆつくり話をした事はないぢやありませんか。

春雄 そりやおかしい。僕は随分お前と話した筈だぜ。

千代子 嘘を仰つしやい。兄さんが機嫌よく話をなさる時には、いつでも傍に嫂さんが居らッしやるわ。あなたは嫂さんと放れて、私に話をなすつた事はないぢやありませんか。

春雄 さう云ふ譯ぢやないんだが……

千代子 いゝえ、さうよ。兄さんの獨りの時を狙つて行くと、あなたはキツと今のやうに逃げて了ふか、さまなければ嫂さんの方から様子を見に入らッしやるのよ。

春雄 そんな事はない。全く邪推だ。

千代子 いくら辯解しても其れは駄目よ。一度二人きりで、親身な、眞面目な話をしようと思つても、兄さんはいつもそつけない素振ばかり見せるんですもの。兄さんは妹に對して、昔よりか餘程薄情におんなすつたわねえ。

春雄 ………

千代子 そりや先と違つて、今は嫂さんと云ふ者もあれば、靜子さんもあるんですから、昔の通りになれないのは當然ですわ。けれども兄妹の親しみだけは持つて居て下すつても、好きなくつて？ ねえ兄さん、此れでも私はあなたのお蔭で原田の家へ嫁いてから、一度だつて兄さんの御恩を忘れた事はない積りよ。かうして態々鎌倉までやつて來たのも、兄さんの御身の上に就いていろいろ心配な事があればこそ、實を云ふと内の方だつてなかなか手が放されないのですけれど、漸くの事で都合をして出て來たんですの。

春雄 お前の親切はよく解つて居る。僕にしたつて、何も冷淡になつた譯ぢやないんだが、若しも氣に觸つた事があるならいくらでも詫るよ。しかしお前も知つて居る通り、僕は病氣になつてから散々河村家の世話になつた上、此の別荘まで借りて居るんだが、たまにお前が尋

ねて來てくれても、つひつひ内の者に氣兼ねをするやうになつちまふんだ。それに梅子があの通りの我が儘者だからね。

千代子 あたしはそんな事を何とも思つて居やしませんわ。河村様のお母様なんぞ、兄さんは勿論あたしに對してすら、親身も及ばぬくらの親切にして下さるんですもの。有り難いとこそ思へ、怨んだりしたら罰が當るわ。たゞあたしは、兄さんが、昔のやうに胸の中の心配を打ち明けて下さらないのが不満足なんですの。

春雄 心配と云つたところで、僕は今のところ、全く仕合せな境遇に向つて居るんだ。病氣は直つたし河村さんの周旋で來月中には比較的いゝ地位に有り附く事も確かだし、此れから先は自分の腕次第でいくらでもえらくなれるんだ。何も心配なんかありやしないよ。

千代子 さうですか知ら？ (暫く無言の儘、兄の顔を判じるやうに眺める) あたしには本當に兄さんの心持が判らないわ。

春雄 本當にも何にも、今話した通りぢやないか。

千代子 兄さん、くだいやうですが、若しか心配事があるなら、たとへどんなに云ひ難い、どんなに恥かしい事柄でも、どうぞ私に話して下さい。私はどんな場合でもきつと兄さんの味方

になつて上げます。私獨りで足りなければ、原田も居ます。原田だつて、私の兄さんの爲めならばどんな事でもしてくれまますから。

春雄 (顔色いよいよ蒼ざめて力なき語勢さなる) 冗談ぢやない、それ程の心配があつたら、僕は梅子に打ち明けるよ。

千代子 嫂さんにも打ち明けれられない場合がありはしなくつて?

春雄 妹に打ち明けていゝ事なら、尙更女房に打ち明けられる筈ぢやないか。あれでも梅子は我が儘な割りに、シツカリした所のある女だよ。別段聞き糺す必要はないけれどお前は何か誤解をして居るやうだ。

千代子 (他聞を憚るやうな低き調子) 本當に誤解だと思つて居らツしやるの。

春雄 何だか知らんが無論誤解さ。僕は此の通り心配も何もないぢやないか。

千代子 兄さんには、私の意味が判つて居らつしやるんでせうね。

春雄 よくは判らないけれど、僕は自分の幸福を信じて居るよ。僕の考へて居る範圍で、自分を不合せだと思ふ事は、一つも見あたらないんだからな。——お前と云ひ、原田君と云ひ、河村の兩親と云ひ、僕を取り巻く人達は、みんな僕の爲めに盡してくれる、親切な人ばかり

だ。さうして梅子は僕の最愛の妻だ。僕が前拾ひをした事も、立身の緒が見付かつた事も、此の世の中に梅子と云ふ者が居なかつたら、僕には全く無意味になるんだ。僕は殆んど梅子の爲めに生れて來たやうなものだ。

千代子 それぢや兄さんは、あなたの氣が付かない所で御自分の幸福を破壊して居る人間があつたら、どうなさるお積りなの。

春雄 そんな人間があらう筈はない。

千代子 しかし、あたしにはどうもあるやうに思はれますわ。實は先月の月末頃に或る人からそんな噂をちよいと耳にしたんですもの。それで此處のところ一週間ばかり暇を作つて、病氣見舞と云ふよりは噂の實否をたしかめる爲めにかうやつてお邪魔に参りましたの、その噂に就いても、嫂さんがまるきり御存知ないとは思はれないわ。

春雄 世間の噂なんぞを信じて居たら、際限のない話ぢやないか。僕は噂よりも自分の判断を信じて居るんだ。

千代子 あたしだつて噂を信じたくはありませんけれど、實際此方へ來て様子を見ると、どうも其れが本當らしく思はれるんですもの。

春雄 おい、僕はお前に注意するが、女と云ふ者は兎角前後の分別なしに軽卒な言を云つていけない。かりにお前が世間の噂を信じたところで、若し其れが發表された場合にどんな結果を來すか考へて見たら、確實な證據を握らない以上は、決して口外出来るものぢやないぜ。

千代子 だけど兄さん、若しもあたしが確實な證據を握つて、あなたの前へ突き付けたら、兄さんはどんな氣持がすると思つて？ あたしは裁判官でもなければ、世間へ發表する氣でもないんですよ。證據を握らうと思へば、毎日機會はあるんですけど、兄さんの名譽のためにわざと控へて居るんですわ。唯それとなく兄さんに忠告すればいいんですから。

春雄 僕はお前の好意に對しては充分に感謝するよ。けれどもそれと同時に、此の兄の言葉を信じて貰ひたい。

千代子 いゝえ、何卒反對に兄さんの方で私の判斷を信じて下さい。信じない迄も、彼の人達が行ひに嫌疑を掛けて、御自分からよく探索して御覽なさい。少し氣を附けて調べて見ればすぐに判る事なんですから。

春雄 僕は探索なんかする必要を認めないんだ。

千代子 兄さん、あなたがどうしても私を信用しないと仰つしやるなら、もう少し詳しい事をお

話しするわ。

春雄 ふゝん、そんなつまらん話は、もう好い加減によさうぢやないか。

千代子 兄さんは男らしくもない、卑怯な方ね。あたしには兄さんの氣持がすつかり判りましたわ。あなたはあたしの口から本當の事を發かれるのを、恐れて居らつしやるんですね。

春雄 馬鹿を云へ。

千代子 いゝえ、さうに違ひないわ。世間に知れないで済む事なら、たとへ自分が踏み付けにされやうと、男の體面を汚されやうと、成るべく見ない振りをして、一時逃れの幸福を楽しもうとなさるんですね。——兄さん、そりや成る程、あたしだつてあなたの胸の中をお察ししないんぢやありませんわ、兄さんは今迄に散散苦勞をなすつた。生きるか死ぬかと云ふやうな大病に罹つてすべての計劃を滅茶滅茶にされてお了ひになつた。折角楽しみにして居た結婚も、今迄は充分に嫂さんを可愛がる暇がおあんなさならなかつた。それなのに漸く病氣が恢復して、此れから世の中を楽しまうとする矢先へ、又新しい心配を持込まれたら、誰だつて大概嫌になりますからね。

春雄 それだけの理窟が判つて居たら、好い加減に話を止めてくれないか。——況んや新しい

心配と云ふものが、實際心配する價值のない事柄なんだから……

千代子 萬一價値があつたらばどうでせう。……此れが若しも、見ない振りをして居て永久に濟んで行くならば、私も別段お話ししようとは思ひませんわ。けれどもいつか一度は、否でも應でも恐ろしい結果に出會すに違ひないわ。時期が遅れれば遅れる程、餘計恐しい結果になるわ。

春雄 ……

千代子 兄さん、あなたは嫂さんを信用すると仰つしやつたわね。

春雄 うん。

千代子 それでもよもや彼の吉川と云ふ人——あの人を信用しては居らつしやらないでせう？

春雄 あの男だつて、世間で云ふ程悪い人間とは思はれないよ。兎に角僕と吉川とは、小學校時代からの友達だから、彼奴の氣心はよく解つて居る。

千代子 そんならあの人の不品行に就いて、今迄度々新聞に素ッば抜かれた事は、みんな嘘だと思つて居らつしやるの。

春雄 そりや本當かも知れないさ。本當にした所で、世間で噂するやうな、血も涙もない、薄情

な男だとは信じられないと云ふのさ。よしんば彼奴がどんな悪人でも、子供の時から付き合い居る友達に對しては、やつぱり暖い感情を持つて居る筈だ。

千子 兄さんはあの人を暗黒面を見せられた事がないから、さう思つて居らつしやるのよ。

春雄 なに僕だつて、彼奴に欺された女の一人や二人は知つて居るよ。彼奴はそれを得々として僕にのろけるくらゐなんだから、割合に無邪氣なんだ。其れを一々不都合だとか不徳だとか怒つて居た日には、男同士の交際は出來なくなるぜ。それに人間と云ふものは、お互ひに理解があると、どんな悪い事をされても、ちよいと腹を立てる譯に行かなくなるんだ。誰しも腹を立てるよりは笑つて交際する方が愉快だからな。

千代子 そんならあの人が、兄さん自身に對して罪を犯した場合にも、笑つて交際なさるんですか。

春雄 まあ大概の事ならば、大目に見て置くさ。僕も此れまで吉川には二三度金を借り倒されたが、面と向へば笑つて濟んで了ふからな。

千代子 そんな時には笑つても濟むでせう。

春雄 理解し合つて居る友達同士は、お互ひに或る程度までの悪事を犯しても、其れ以上の不道

徳は絶対にしないもんだよ。

千代子 其の考へが間違つて居るんですよ。今だから白状しますが、彼の人は私のやうな者にま
で、以前は随分嫌らしい眞似をしたんですよ。

春雄 彼奴の事だから、友達にふざけるぐらゐはしかねないだらう。

千代子 もつと非道い事だつて、しかねないんです。兄さん、よく考へて御覽なさい。あの人は
何の爲めに此の録音へ来て居るんです。而も此の近所の宿屋へ泊つて、毎日此處へ遊びに來
て大切な時間を殆んどあなた方と一緒に過して居るぢやありませんか。

春雄 吉川だつて別段忙しい商賣ぢやないんだから、遊んで居るのに不思議はないさ。

千代子 しかし、かりにも雑誌の記者をして居て、態々不便な田舎へ來すともいふと思ふわ。そ
れに道樂をしたり、芝居を見たり、なかなか忙しいんですから、東京に居なければ用が足り
ない筈なんですよ。

春雄 それだけの事で、吉川を疑ふのは酷ぢやないか。

千代子 そればかりぢやないわ。あの人が嫂さんに對する素振を見れば、どうしても疑はずには
居られないわ。二人で二階へ上つたとき、一時間も二時間も降りて來なかつたり、日の暮れ

る迄一緒に海岸を散歩したり、嫂さんの方からあの人の宿屋へ遊びに行つたり……

春雄 お前だつて、原田君の友達と芝居見物に出かけるぢやないか。

千代子 けれども場合が違ひますわ。あの人達の口のきゝやうや、眼の配り方を氣付けて御覽
なさい、それにおかしいのは、昨夜嫂さんが東京へお立ちになつてから、吉川さんは姿を見
せないぢやありませんか。

春雄 お前は偶然の出來事に理窟を付けて居るんだ。

千代子 しかし兄さん、一應疑つて見て、あの人が昨夜から宿屋に居るかどうか詮索してもよく
はなかつて？

春雄 宿屋に居なければ、どうしたと云ふんだい。二人で東京へ行つたと断定するのはい。

千代子 宿屋に居ないばかりか、一緒に汽車へ乗つたところを見た人があつたらば、どうでせう。
春雄 見た人があると云ふのかい。

千代子 えゝ、あるんです。昨夜あたしは嫂さんがお出掛けになると、直ぐにあとから停車場ま
で附いて参りました。すると吉川さんがちやんと待つて居るんです。

春雄 それで二人はどんな様子だつたい。何か話をして居たかい。

千代子 顔を見られちやまづいから、遠くの方から見届けて歸つて來たわ。

春雄 そんなら話にならないぢやないか。吉川だつて東京に用のある男だもの、偶然停車場へ落ち合つたのかも知れやしない。

千代子 偶然に落ち合つたのか、約束をして置いたのか、一目見れば直ぐに解つてよ。

春雄 どう云ふ風に解るんだね。色眼鏡を懸けて見れば、何だつて怪しく思はれるからな。

千代子 いゝえたしかにさうらしいの。私の云ふ事が嘘だか本當だか、今に嫂さんがお歸りになればキツと解るわ。——若しも嫂さんに疚しい所がなかつたら、昨夜の事をお隠しになる筈はないけれど、あたしやキツとお歸りになつても黙つて居らッしやるだらうと思ふわ。

春雄 ……

千代子 萬一隠し立をなさるやうなら、兄さんだつて疑はずに居られないでせうね。

春雄 ……

千代子 ねえ兄さん、さうぢやなくつて？ それでもやつぱり證據がなければ駄目だと仰つしやるの？

春雄 ……

千代子 いよいよさうなつた場合に、あたしは兄さんの決心を聞かして頂きたいんですの。

春雄 まあ待つてくれ。決心などとさう譯もなく云ひ出されちや、僕も迷惑だ。成る程先からのお前の意見は解つて居るが、此方の事情も少しは考へて貰ひたい。兎に角、誰が何を云はうとも、僕は梅子を信じて居るんだ。彼奴を信じる事が出来なくなれば、僕の幸福は破壊されて了ふんだ。けれどもそれ程お前が疑ふのなら、過ぎ去つた事は仕様がなとして、此の後吉川を寄せつけないやうにしようぢやないか。其れが一番安全な方法だと思ふ。

千代子 安全過ぎて、何の効能もなささうだわね。

春雄 (少し痾癪を起す) では一體どうしろと云ふんだ。

千代子 過ぎ去つた事は仕様がなとして、あなたは嫂さんをお許しになるお積りなの。

春雄 ハツキリした落度もないのに、どうする事も出来ないぢやないか。

千代子 出来ないと仰つしやれば其れ迄だけれど、それで御自分の氣持ちが済むでせうか。

——成る程河村さんの御両親は、兄さんの爲めに大恩人には違ひない、靜子さんと云ふ可愛い子供も御有んなさるし、——しかし兄さん、たとへ恩人の娘でも、夫として許す事と許されない事と有りますからね。

春雄 ………

千代子 こゝで兄さんが、男らしい處置を取らなければ、自分の立身出世の爲めに、嫂さんの御機嫌を取つて居ると云はれても、辯解の途がないぢやありませんか。

春雄 世間の奴が何と云はうと勝手にするさ。

千代子 世間ばかりか、あたしだつてさう思ふわ。——河村さんと縁が切れれば、出世する事が出来ないやうな そんな意氣地のない兄さんぢやないでせう。工學士と云ふ肩書があるんですもの、今度のやうないゝ地位は見當らないとしても、立派に大手を振つて、何處へでも遣入れるぢやありませんか。

春雄 千代子、お前は僕がどのくらゐ梅子を可愛がつて居るか想像が着かないのだらう。成る程僕は男としての野心もある。相當に慾望も持つて居る。しかし、單純な利慾の爲めに名譽を抛つ程の卑屈な人間ぢやない積りだ。僕は唯だ梅子が可愛いゝばかりなんだ。梅子を喜ばせる爲めには、どんな惡辣などんな陰險な手段を取つても、必ず金を儲けて見せる。

千代子 兄さんにそんな度胸があつて？

春雄 氣の小さい人間程、愛情の爲めには大膽になれるものだ。僕は金儲けの爲めに梅子を可愛

がるんぢやない。梅子を可愛がる爲めに金儲けをしようと云ふんだ。

千代子 (嘲弄的に) さうすると、嫂さんを授けて下すつたのも河村様だし、立派な地位に引き立てゝ下すつたのも河村さんだし、あの御両親はあなたの爲めに救世主のやうなものですね
春雄 まあ、さうだ。僕は一生、彼の人達と手を切る事は出来ないんだ。たとへお前に意氣地なしと云はれても、何と云はれても差支へない。

千代子 (呆れたやうに眼を見張つたが、やがて感情を押し鎮めて) 兄さん、あなたはあんまり情けな
い事を仰つしやる。あたしが此れ程心配して居るのに、妹なんぞはどうなつてもいいお積り
なの。

春雄 さう云ふ譯ぢやないけれど、僕に取つてはお前よりも梅子の方が大切だからな。

千代子 しかし嫂さんは、あたしが思つて居る半分も、兄さんを思つて居やしないわ。一層あな
たを邪魔にして居る位だわ。

春雄 そんな事がお前に判つて溜るものか。

千代子 いゝえ、判つて居ますとも——なんほ嫂さんが可愛くつても、外の男に愛情を注ぐや
うなら、思ひ切つて了ふのが當然ぢやなくつて？ それでも兄さんは、やつぱり思ひ切れな

いんですか。

春雄 それでもとは何だ。(こうとう痼癢を破裂させる) 何ほ何でもあんまり口が過ぎるぢやないか、そんな事を云ふなら、レッキとした證據を持つて来るがい。

千代子 え、持つて来ますとも。明日歸るまでに、キツと證據を掴んで見せるわ。さうなつたら兄さんだつて、ほんとに決心なさるでせうね。

春雄 お前は平地に波瀾を起して、それを面白いと思ふのかい。

千代子 おほ、(涙ぐみつゝ、わざと甲高く笑ふ) 今日には久し振りで兄さんと喧嘩をしちやつたわね。どうせ後になれば解る事なんだから、いくら喧嘩をしたつて構はないわ。あたしは此れでも、兄さんの遠い行く末を考へて居るんですから……

千代子、上手の障子を開けて去る。春雄は頭を抱へ、懊鬱に堪へざる如くデスクに突俯す。

第四節

梅子、千代子と行き違ひに下手の縁側から遣入つて来る。面長く、背恰好の優れた、千代子よりは一二段勝りたる容貌。二十三四歳なれど、年齢の割りに派手な好みの衣類を着て、襟頭に

エールを巻きつけ右手に小ひさい袋を下げて居る。

梅子 唯今。(夫の傍に立つ) 大變遅かつたでしよ。

春雄 (少しく元氣を恢復する) うん、そんなでもなかつた。どうだい、いゝ家があつたかい。

梅子 (息を切らせながら、忙しさに、早口に語る) 溜池の近所に一軒いゝ家が見附かつたの。二階が八疊に四疊半で、下は玄關が三疊、六疊二た間に四疊半の女中部屋が附いて居て、風呂場もあるし便所も綺麗だし、申分がないと思ふわ。

春雄 家賃はいくらだ。

梅子 二十五圓。それに敷金が三つ。建具もしつかりして居るし、押入は澤山あるし、何より有難いのは、間取りの具合が明るくつて馬鹿にいゝんですの、あたし薄暗い家が大嫌ひだから春雄 借りる事にきめて来たのかい。

梅子 二三日中に挨拶するつて、さう云つて来たわ。

春雄 なぜ？ 極めて来たらばよかしたぢやないか。

梅子 だけど一遍あなたに見せてからと思つたの。

春雄 己はいつでもいゝんだから、お前さへ好ければ極めて来た方が宜かつたのになあ。そんないゝ家は、グズグズして居るとすぐに塞つて了ふぜ。

梅子 だからあなた、明日お天気が好かつたら、ちよいと行つて見て来て下さいな。

春雄 うむ、………(何か他の事を考へ出したやうに、生返事する)

梅子 ね、明日の朝早くお起きになれば、明るいうちに行つて來られるわ。

春雄 さうだ、明日千代子が東京へ歸ると云ふから、其の時一緒に行くとしよう。なあに、遅くなつたら都合で赤坂へ泊めて貰ふさ。

梅子 それぢや、さうして下さいな。(上手へ来て鏡臺の前に坐り、鏡臺の上に置く。抽出しから櫛を取り出して、鹿髪の鬘を直し始める) ——へーえ、千代子さんは明日歸るんですつて？

春雄 うん、明日はどうしても歸らなければならぬさうだ。

梅子 さうですか、嫌ひな人は早く居なくなつた方がさつぱりするわ。

春雄 もう歸るんだから、あんまりあて付けない方がいゝさ。

梅子 あゝそれからね、ゆうべ赤坂へ泊つたら、父がいろいろあなたの事を心配してね、來月の半ば頃には是非任命が下るやうにして置いたから、御安心なさいつて。

春雄 それは有り難う。

梅子 さう云へば昨夜停車場で吉川さんに遇ひましたつけ。

春雄 ふん。

梅子 「何方へお出掛けです」つて聞いたら、頭を掻き掻き「ちよいと東京の隠れ家まで」つて變ににやにや笑つて居るのよ。

春雄 彼奴、隠れ家は方々にあるからな。

梅子 ところがおかしいぢやありませんか。だんだん問ひ糺して見ると、其の隠れ家と云ふのが赤坂の内の近所なのよ。

春雄 あはゝゝゝ、(何さなく不自然な笑ひ方をする) 奴さん飛んだ所を見附かつたもんだ。

梅子 丁度いゝから、一緒に汽車へ乗つて、新橋から内の前まで送らせてやつたわ。

春雄 まだ先生は歸つて來ないのかい。

梅子 さあ、どうですか、事に依つたら歸つて居るかも知れなくつてよ。明日は是非午前中に歸りますつて、あたしに悪い事でもしたやうに頻りと辯解して居ましたもの。

春雄 歸つて來たら遊びに來さうなもんだがな。

梅子　こんなお天氣に、ひとりで内に引込んで居ると随分退屈するでせう。——お母様や靜子は何方へ行つたの。

春雄　もう少し先海岸へ出掛けたやうだ。——かう陽氣が暖くなつちや、東京もそろそろ櫻が咲くだらうな。

梅子　あゝ田舎なんか嫌だ、嫌だ。早く東京へ歸りたいわ。ねえあなた、千代子さんを送りがてら、明日忘れずに東京へ行つて来て下さいよ。

春雄　うん行つて来よう。

女中まつ登場。

まつ　あの吉川様がお出ででございます。

梅子　あ、ちよいとお待ち。あたし隠れて居てやらう。(袋ミエールを一掴みにしてあはてて上手の障子の外へ逃げ出す)

女中まつ退場。

第五節

上手より直ぐに吉川が遣入つて来る。春雄と同じ年配、色の淺黒い、頭を角刈にした、苦み走つた好男子、瀟洒たる背廣の服を着て、胸間に金鎖を光らせて居る。いかにも才氣の迸るやうな口のきゝやうをする。

吉川　や、失敬、(いきなり火鉢の右の座蒲團にあぐらを掻く。烏打帽を脱いで、ハンケチで顔の汗を拭く)

梅子さんはまだ歸らないかい。

春雄　まだだ。

吉川　そいつは締めた。

春雄　どうしたんだい、ひどく汗を掻いてるぢやないか。

吉川　實は君、昨夜こつそり東京へ泊りに行かうと思つたら、運悪く停車場で君の妻君に見附かつちまつてね。とうとう一緒に汽車に乗せられて、新橋へ着いてもまだ放免にならないのさ
春雄　全體君は何處へ泊りに行つたんだ。

吉川　それがさ、やつぱり赤坂なんだから方面が悪いぢやないか。「赤坂なら御一緒に参りませう」ッて散々冷かされて、とうとう君、河村さんの家の前まで引張つて行かれたんだ。君の

妻君もなかなか隅へ置けないよ。

春雄 あはゝゝゝ、そいつは大笑ひだ。

吉川 あんまり冷かされるから意地になつて、「明日の朝は早く鎌倉へ歸ります」ッて云つちやつたのさ。何ほ何んでもだらしがないと思はれるからね。

春雄 柄にない心配をしたもんだな。君の道樂は今に始つた事ぢやなからう。

吉川 それもさうだが、兎に角君の妻君より先に歸つて来る積りで、大急ぎに戻つたんだ。今に梅子さんが見えたら、僕は今朝歸つた事にしてくれ給へ。

春雄 よろしい、承知した。

吉川 きつとだぜ、君。妻君ばかり可愛がらないで、たまには友達の意味方になつてもいいだらう

梅子障子の蔭より現れる。

梅子 吉川さん、昨晚はお楽しみ。(火鉢の左側に坐す) 大變お歸りがお早いのね。

吉川 はゝあ、さうか。やつぱり一杯喰はされたのか。

春雄 あはゝゝゝ。

梅子 夫婦共謀の計に陥つたな。

春雄 梅子の方が君より一と汽車早かつたよ。

梅子 あたしはあなたのやうにだらしがないんぢやありませんからね。

吉川 いや、恐縮々々。

梅子 それでもあなたは案外正直ね。何て云ふかと思つたら、昨夜の事をすつかり白状なすつたわね。

吉川 どうせあなたの口から洩れるくらゐなら、白状する方が正直だと思はれるだけ徳ですよ。

正直ぢやないんです、つまり惻巧なんです。

春雄 君は大さう悪黨がる男だね。正直だと云ふのに、辯解しなくツてもよささうなものだ。

吉川 しかし、全く正直な人間ぢやないんだよ。——君、正直な人間よりも惻巧な人間の方が、

却つて餘計正直な事があるんだぜ。何か間違ひを仕出かす奴はみんな正直な人間さ。正直な人間程、安心の出来ない者はないよ。

春雄 惻巧な人間は何をしても、馬脚を露はさないからな。

吉川 うん、さうだ。

春雄 ところが君は、早速馬脚を露はしたぢやないか。

吉川 今の事は例外だ。露はしてもいゝ事は、いくらでも露はすが、いざとなつたら世間に露れるやうなへまはしないさ。

梅子 それぢや吉川さんなら信用しても大丈夫なの。

吉川 えゝ大丈夫ですとも。——さう云へば梅子さん、いゝ家が見附かつたんですか。

梅子 えゝ、見附かつたわ。大概それにきめようと思ひますの。

吉川 すると、もう鎌倉にも長くは居られないんですね。どうだい三枝君、明日お天気だつたらお名残に二人で江の島へでも行かうぢやないか。

春雄 一度何處かへ行つてもいゝな。暫く一緒に出掛けた事がなかつたね。

梅子 それでもあなた、明日は東京へお出でになるのよ。

吉川 へえ！ 何用で？

梅子 いゝえね、一遍宅に其の家を見て貰つて、若しも好かつたら早速きめて了ひますの。

吉川 あゝ、さうですか。塞がつかまふといけないから。極めるなら早い方が宜いござんすな。

梅子 さうよ、ほんとに。

第六節

雪子、靜子、庭より縁側の上る。

靜子 (母の前に坐る) お母さん、お歸りなさい。

梅子 (寢椅子に腰を下ろす) はい、唯今。

雪子 吉川さん、入らつしやいませ。今日はどちらへお出掛け。

吉川 いえ、僕も東京へ行つて、梅子さんより一と汽車遅れて歸つて参たところですよ。

雪子 (寢椅子に腰を下ろす) さうでしたか。實はあんまり退屈なもんですから、先刻もあなたのお噂をして居りましたの。今夜は御馳走しますから、ゆつくり遊んで居らつしやいな。

吉川 それぢや御馳走になりますかな。

雪子 (梅子に) お前家を捜しに行つたんだつてね。

梅子 えゝ、誰に聞いて？

雪子 春雄さんから聞いたけれど、口がきまるまで此處に居た方がいゝぢやないか。

梅子 もう鎌倉なんか飽き飽きしたわ。それに役所の方も近々任命が下るやうにゆふべお父様が

受け合つて下すつたから大丈夫なの、——まあ、お母さん、ほんとにいゝ家が見附つたのよ。
雪子 どの邊に？

梅子 溜池の停留場から五六丁の處なの。それはもう何から何までお誂へ向きで、あたしすつかり惚れ込んで了つたわ。彼の家が見附かつたら、何だか急に東京へ歸りたくつて溜らなくなつちやつたわ。

吉川 地位は見附かつたし、家は極まつたし、今夜は一つ三枝君の爲めに祝杯を擧げるかな。

雪子 たんと二人に奢らせておやんなさいよ。

梅子 よござんすともいくらでも御馳走してよ。

春雄 長い間心配をかけたんだから、今日は僕獨でみんなに御馳走するとしよう。(椅子から立つて縁側に行き、砂山の方を望む) あゝもう日が暮れる時分だな。何かうまい物を注文して、そろそろ夕飯の支度にかゝつて貰はうかな。

春雄は後ろ向きにイんだまゝ、伸びをする。一同無言にて戸外の空を眺める。(幕)

第二幕

海岸の夜、——舞臺上手より下手の方へ、匂配の緩やかな砂山が、だらだらと袋裾を擴げて居る。上手の砂山の頂上より前方中腹へかけて一叢の松林、其の後ろに別荘の二階の屋根が見える。下手の方は洋々たる一面の海地平線が丁度舞臺の中央で砂山の蔭に隠れて行く。第一幕と同じ日の午後七時頃。晴れたる空に満月が朧々を霞んで居る。(幕が開いてから程なく月は次第に舞臺の外へ運行して了ふ)極めて穏やかな波の音。

第一節

吉川、梅子、千代子、下手より歩いて来る。梅子は不斷着のお召に着換へて居る。他の二人は前の幕と同じ服装で、吉川はステッキを持つ。

梅子 あゝもう内の前へ来て了つた。千代子さん、もう少し散歩なさらなくつて？

三人中央に立ち止まる。

千代子 だつて、あたし足疲れて了ひましたわ。

梅子 吉川さんはどうなさるの。

吉川 あなた方がいやなら、獨りで歩きますよ。三枝君の御馳走で、僕は未だに腹がくちい。

梅子 あたしも實はさうなのよ。

吉川 さうでせう。あなた方だつてあんなに喰べて置きながら運動しないぢや毒ですぜ。

千代子 そんならあたしだけ歸りますから、嫂さんもツと散歩なさいな。

梅子 だけど千代子さんが居なくつちや……

千代子 おかしいわね。お二人ぢや御都合が悪いの？

梅子 悪かないけれど、千代子さんは明日東京へお歸りになるんでせう。

千代子 えゝ歸るわ。

梅子 何時頃に？

千代子 成るだけ朝早く歸りたいと思ひますの。

梅子 それぢや今夜がお名残りだから、もう少し一緒に歩きませうよ。

千代子 一緒に歩いたつて別に話す事はないぢやありませんか。それに全く足疲れて了つたの。

梅子 あなたとあたしとは、此の一週間とうとう喧嘩のしつとけね。それぢや此のまゝ仲直りをしないで別れませうか。

千代子 お互ひに其の方がよくなかつて？

梅子 ほんとにさうね、珍らしく意見が一致したことね。

千代子 吉川さん、左様なら。

吉川 (いつの間にか砂山に足を投げ出して居る) ちよいとお待ちなさい。僕が仲裁するから、まあ仲直りをして行き給へ。

千代子 よくつてよ。どうせ嫂さんとは性が合はないんですから。

吉川 性が合はなかつても、喧嘩するにはあたらないでせう。僕を見給へ、生れてから未だ嘗て一度も喧嘩をした事がないぜ。

千代子 だからあなたは悪黨よ。

吉川 あなた方も僕の弟子になつて、もう少し悪黨の修業を積むさ。

千代子 眞平だわ。嫂さんお先へ御免なさい。

梅子 お嫌でせうけれど、明日の朝もう一遍お眼にかゝつてよ。

千代子 えゝ何度でも。

吉川 僕も明日は停車場までお送りします。

千代子 あら、そんな御心配には及びませんわ。

吉川 なあにどうせ遊んで居ますから。

砂山を上つて向うへ消える。

第二節

吉川 どうです、もう少し其の邊をぶらつきますか。

梅子 え、どつちでもいゝわ。(と云ひながら、吉川の傍へ躊躇る) 實は私も足疲れて居るんですの。

吉川 そんならお宅へ歸りませうよ。まだ時刻が早いんだから、僕ももう一遍送つて行きます。

梅子 いや、いや、(首を振る) あたし千代子さんの顔を見るのも嫌だから、わざとあゝ云つて別れて了つたの。

吉川 その位なら、初めから誘はない方がいゝぢやありませんか。

梅子 だつて彼の人を誘はないと、妙な嫌味を云ふんですもの。ほんとに好かない人だわ。

吉川 可哀さうに。それ程嫌はなかつても好ごさんすよ。千代子さんはあれでなかなか情愛の籠

つた親切な所が見えますよ。

梅子 情愛なんぞあるもんですか。あたしが何か頼んだつて、一つとして聞いてくれた事なんかありやしないわ。假にも義理の姉を馬鹿にするなんて、何處に親切があるんでせう。

吉川 あなたに對してはさうかも知れないが、一般に云つたらいゝ人です。立派な夫人ですよ。

梅子 あなたは大さうお褒めになるのね。

吉川 褒めちや悪いんですか。

梅子 たとへ自分の事だつて、あんまり褒められゝば腹が立つわ、此の間もあなたは、三枝の事を大層褒めて下さつたわね。

吉川 そりや褒めますとも、三枝君はいゝ人です。兎に角僕に對してはいゝ人です。あのくらゐ僕の性質を理解して居る友達はありませんよ。

二人の會話は眞面目だが冗談だか列らない調子になる。

梅子 三枝の方でもさう云つて居ますわ。

吉川 何だつて？

梅子 あなたは世間で云ふやうな悪人ぢやないんですつて。悪人かも知れないけれど、割合に暖

かい所のある、始終笑つて話しの出来る悪人ですつて。

吉川 全くそれに違ひないんです。よしんば僕と三枝君と、どんなに利益が反對するやうな地位に立つても、僕は決してあの人を憎む譯には行きませんよ。一體あなたは三枝君をどう云ふ人間だと思つて居るんです。

空が少しく曇つて、地上は稍薄暗くなる。砂山の上に三枝の姿が現はれる。兩人の影を認めて心持足音を忍ばせつゝ、一間ばかりうしろに近附き、成るべく發見されても差支へないやうな姿勢を取つて、密かに耳を澄ます。兩人心附かず。

梅子 そりや、ほんとにいゝ人だと思つて居るわ。全くあたしを可愛がつてくれるんですもの。

吉川 どうも男の性質と云ふものは、妻君よりも友達の方が却つてよく解るやうですね。僕は子供の時から三枝君と同じ學校に育つたんで、あの子の氣持ちは實によく解りますよ。

梅子 しかしあんまり優し過ぎて、男らしくないと思ふ事が時々あるわ。

吉川 それがいゝんです。あなたなんぞの御亭主は、大人しくなかつたら一日も勤まりませんぜあの子はよくあなたの氣象を呑み込んで居ますよ。夫としてあのくらの親切な、あのくらの寛大な人はめつたにありません。何處まで行つたら腹を立てるのだから、あの子ばかりは解り

ませんな。

梅子 あたしもその點は感謝してゐる積りなの。どんな事があらうと、あたしを信じ切つて居るんですからね。

吉川 さう云へばあなたはいつ東京へお引越しになりますか？

梅子 二三日うちに引き揚げようかと思ひますの。あなたは。

吉川 僕も早い方がいゝです。大分此方で遊んだので、用事が山のやうに溜つて居るんです。

梅子 やつぱり赤坂か、麴町邊になさいましな。

吉川 えゝさうしませう。ところで明日三枝君は東京へ行くんですか。

梅子 お天氣さへ好ければ屹度行くわ。是非行くやうにさう云つたんですもの。

吉川 日歸りですか、それとも一晩泊るんですか。

梅子 まだハッキリ極まつて居ないんですの。久し振で赤坂へ行くんですから、泊らないとしても歸りはどうせ遅くなるわ。

春雄は立聽きしながら、俄に昂奮して恐怖に充ちた眼を光らせる。

吉川 立つのは何時の汽車でせう。

梅子 千代子さんと一緒だから、大概午前中よ。

吉川 そんなら僕は、明日の朝早く伺ひますよ。さうして停車場まで送つて行かう。

梅子 あたしは内に待つて居ますから……

二三歩退いて、今度はわざと足音高く二人の傍へ歩いて来る。

春雄 (いかにも快活らしい調子にて) おい、おい、二人共其處に居るのかい。

梅子吃驚して後ろを振り向く。吉川は俯向いて、何氣ない體でステッキをいぢくつて居る。

春雄 惜しい事に月が曇つて了つたな。(二人の傍へ躊躇る)

吉川 先から此處に居たのに、君は何處を歩いて居たんだい。

春雄 今出て來たんだ。

梅子 あなた、羽織を召さないと風邪を引いてよ。ちよいと内へ行つて、引掛けていらッしやいよ。

吉川 あなたが持つて來る役だね。

梅子 いやだわあたし、持つて來て上げてもらへけれど、又千代子さんに顔を合せるのが不愉快だから。

春雄 いよよ、いよよ、今夜は大分暖かなやうだ。それに久し振りで飲んだせるか、僕はまだ酔つて居る。

吉川 どうだい、たまには酔つて見るのも好い氣持だらう。

春雄 うん、いよよ。

吉川 明日東京へ行くなら、明後日あたり江の島へ出掛けようぢやないか。さうして又大いに飲むさ。

春雄 君と一緒にや危い。

吉川 大丈夫だよ。梅子さんどうです、少しくらゐ酒を飲ましたつて差支へないでせう。

梅子 えい、いよよ、あたしは宅を信用して居りますから。

春雄 あはよよよ。(力なく笑ふ)

吉川 どうしたんだか君は今日元氣がないね。

春雄 元氣は大いにあるさ。大いにあるが唯面へ現はさないだけさ。今に見給へ、此の元氣を貯へて盛んに活動して、大金儲けをして見せるから。——さうなつたら、少しは君にも恵んでやるよ。

吉川 湯水をお金のやうに使ふんだらう。

梅子 此の頃宅はお金持になつた夢ばかり見て居るんですと。あたしに指輪を買つて呉れたり、二人で洋行に出掛けたり、夢の話と來たら大變よ。

春雄 今に本當にして見せるから。

吉川 どれ、吾輩も宿屋へ歸つて、金儲けの夢でも見るか。

春雄 まだいゝだらう。漸く八時だぜ。

吉川 いや、明日の朝早くお訪ねするよ。それぢや失敬。

春雄 さうか、そんなら失敬。

梅子 左様なら、お休みなさい。

吉川 下手へ去る。

第三節

梅子 あたしたちも歸りませうか。(立たうとする)

春雄 まあもう少し此處に居ておくれ。實はお前に話があるんだ。

梅子 ……(氣遣はしげに再び坐る)

春雄 話と云ふと大袈裟だが、ほんたうに下らない事なんだ。全く取るに足らない事なんだから、お前氣持ちを悪くしちゃいけないぜ。此れだけは前以て頼んで置く。

梅子 一體何の話なの。

春雄 外でもないんだが、此の頃己は或る人からおかしな忠告を受けたんだ。(一言一句戦々兢兢として、成る可く妻を怒らせまいとする)

梅子 はあ。

春雄 お前、此の話は誰にも云つちやいけないぜ。お母様にも、千代子にも、吉川にも——いゝかい、大丈夫だらうね。

梅子 云つて悪ければ誰にも云やしないわ。だけど氣懸りだから、早く聞かして頂戴よ。

春雄 その、つまり何だ、或る人がお前を誤解して居るんだ、己は決してそんな事を微塵も信じて居やしないが、お前が己以外の或る人間と不道德な眞似をして居るやうに、邪推して居る人があるんだ。

梅子 誰がそんな事を云ふんです。

春雄 まあ誰でもいいさ。

梅子 それだけの話をなさる以上は、誰だか名前を仰つしやいよ、あたしに隠す必要はなくてよ。
春雄 此ればかりは困るんだから。名前を云ふ事だけは赦しておくれ。

梅子 だつてあんまり馬鹿にしてるわ。あなたに忠告するくらゐなら、定めし證據があるんでせうから、あたし其の人の前へ出て、執方が正しいか立派に明りを立て、貰ふわ。

春雄 まあさ、お聞きよ。初めからさう怒つて了つちや、まるで話が出來ないぢやないか。——
己だつて、そんな馬鹿げた事を信じる譯には行かないから、何か證據を見せろと云つたのさ、所が生憎證據なんぞ何もありません。

梅子 随分無責任な人もあるものね。證據がなくつて、どうしてそんな事が云へるんでせう。

春雄 ほんとに下らない話なんだよ。「僕は梅子を信じて居るから、さう云ふ忠告は止めて貰ひたい。若しも飽く迄主張するなら、レッキとした證據を出せ。」つて、殿しく跳ね付けて了つたんだ。さうすると先方ぢや負けない氣になつて、「二三日中に必ず證據を掴んで見せる」つて云ひ出したのさ。

梅子 それからあなたは何んと仰つしやつたの？

春雄 相手にしたつて仕様がなから、「どうとも勝手にしろ」つて、其まゝ別れて了つたあね。

梅子 是非共證據を持つて來てくれろつて、お頼みになれば面白かつたのに。——あたし誰か云つたのか大概判つたわ。

春雄 判つたら判つたでいゝさ。しかし其人だつて、何も悪氣で云つた譯ぢやないんだよ。やつぱり己の事を心配して、兎に角親切に教へてくれたんだから、云はゞ有難迷惑なんだ。

梅子 それで全體あたしが誰とおかしいんでせう。

春雄 かうなつたら云つて了ふが、相手は吉川だと云ふのさ。

梅子 多分さうなんだらうと思つたわ。あの人より外に、此頃内へ來る人はありませんからね。

春雄 吉川こそつまらない嫌疑を受けて、飛んだ災難だよ。

梅子 お互ひに損ですから、譯を話して、あんまり内へ來て貰はないやうにしませうか。

春雄 さうさなあ、そいつもまづいからな。

空が再び晴れて。月光地上に満つ。

梅子 ねえ、さうして貰ひませうよ。

春雄 けれどもそんな事で友達の縁を切るのは、あんまり馬鹿けて居るからなあ。己は吉川に對

して済まないやうな氣がするよ。

梅子 だつて、さうでもして下さらなけりや、あたしが困るわ。

春雄 彼奴とは二十年來の付き合ひなんだから、此處でお互ひに嫌な顔をして、別れ別れになつて了ふのも、一生不愉快だからなあ。——こんな話はもともと己獨の胸へ收めて、お前が聞かなかつた事にすれば、差支へないんだ。

梅子 どうとでも、あなたの氣の済むやうにして下さいな。そりやあたしだつて、全く別の意味で、吉川さんが嫌ひぢやないわ。現にかうやつて、仲好して居るくらゐですもの。あの人が遊びに來なくなれば、随分淋しいだらうと思ふわ。しかし、此ればつかりは外の事と違ふんだから……

春雄 だからいゝぢやないか。吉川は勿論お前もこの話は聞かなかつた積りで、今迄通り交際するさ。己は自分の爲めにお前の行動を束縛したり、干渉したりする氣はないんだよ。己はお前を心の底から信用して愛して居るよ。お前に不満足を與へたり、不自由を與へたりすれば己だつてやつぱり好い氣持はしないんだ。お前がしたいと思ふ事は何でもするがいゝ。好きな人ならいくらでも交際するがいゝ。(だんだんセンチメンタルになる) 唯己がどのくらゐお前

を愛して居るか、それさへ解つてくれれば、別に何も云ふ事はない。

梅子 それはよく解つて居るわ。何ほあたしが我儘だつて、心の中では有り難いと思つて居るわ。

春雄 己を幸福にするのも、不仕合はせにするのも、みんなお前の心一つにあるんだ。お前は己を殺す事も生かす事も出来るんだ。

梅子 もう、よく解つて居るんですから、そんな話は止して頂戴よ。

春雄 己は病氣で死にさうになつた最中でも、自分の命を惜しいとは思はなかつた。お前と静子を幸福にさせたい一心で、も一度全快するやうに、神様に願つたんだ。其の一心がなかつたら、己は疾づくに死んで居たかも知れないんだ。

梅子 あなた。又あんまり昂奮なさると體に毒よ。いゝ加減にして内へ歸りませう。

春雄 あゝ歸らう。だがほんたうに己の心は解つてくれたらうな。

梅子 解つて居ますとも。

春雄 解つてくれたら、己はもう一つお願いがあるんだ。

梅子 どんなこと?

春雄 先も云つた通り、己は其の人の忠告を少しも信じて居やしない。けれども先方では意地に

なつて二三日中に是非共證據を捕まへると云つて居るのだから、こゝ暫くの間お前も用心してつまらない誤解を受けないやうにしておくれ。

梅子 あなたもおかしな事を仰つしやるわね。身に覚えのない事なら、用心する必要なんかありやしないわ。

春雄 そりや勿論の話だが、疚しい所がないだけに、却つて遠慮が無さ過ぎて、飛んだ誤解を受ける事があるよ。その上先方は苦しまぎれにどんな難癖を附けないとも限らないからね。

梅子 それ御覽なさいな。だからやつぱり。吉川さんを寄せ附けない方がいゝんでせう。

春雄 いやいやさう云ふ譯ぢやないんだよ。唯二三日の間、先方が手を引いて了ふまで、少し控目にしてくれゝばいゝんだ。なあに其の人さへ遠退いたら、もう何をしたつて安心さ。(立ち上る)

梅子 あの人はあたしを目の敵にして居るんだわね。

春雄 お前もあまり取り合はない方がいゝよ。……さあ、歸らう。

兩人砂山を上り行く。

上手松林の中より び足に千代子が現れる。砂山の彼方に隠れ行く兩人の姿を見送りながら、

黙然として舞臺の中央に立つ。幕

第三幕

第一幕と同じ室内。時間は第二幕より直ちに連なる。

第一節

春雄と梅子が入つて来る。

梅子 みんな何處へ行つたんでせう。

春雄 きつと二階だよ。靜子の聲が聞えるぜ。

梅子 あの子はまだ寐ないのか知ら。もう九時になるのに。

春雄 それにしても、千代子が居ないやうだ。又何處かへ行つたのかな。

梅子 今時分獨りで夜歩きをするなんて、千代子さんの方が餘程怪しいわ。……

此時廊下に足音が聞える。

梅子 ……あ、千代子さんだ。あたし二階へ行つてわ。

梅子上手の障子を開けて去る。

第二節

下手より千代子登場、

千代子 兄さん、嫂さんはどちら。

春雄 今二階へ行つた。お前は今迄何處に居たんだ。

千代子 (春雄の前に立したまゝ、話し続ける) あれから又散歩に出掛けましたの。——兄さん、あ

たし少ウし都合がありますから、今夜東京へ歸りますわ。

春雄 なぜ。

千代子 でも考へた事がありますから。

春雄 だつてもう遅いぢやないか。

千代子 まだ九時ですから、大丈夫よ。——それでね兄さん、晝間あなたと喧嘩をしましたけれど、此のまゝ別れるのは氣持が悪いから、仲直りをして下さいな。

春雄 僕の方ぢや何とも思つて居ないんだから、お前がさう云つてくれゝば結構だよ。

千代子 何卒兄さん、先の事は勘忍して下さい。ほんとにあたしが悪かつたわ。あれはすつかり取り消しにして置くわ。

春雄 どうして。

千代子 あたしは本當に馬鹿な人間だつたわ。今時あたし程馬鹿な人間は、世界中にないと思つたわ。

春雄 何だかおかしいな。僕にはさつぱり判らんよ。

千代子 實は白状しますけれど、あたしは今、松林の中であなたと嫂さんのお話をすつかり聽いて了ひましたよ。

春雄 お前あれを聽いて居たのか。

千代子 そんなに驚かなくつてもよござんすよ。あたしはあれを聽いて、ほんとに感心しましたわ。かりにも兄さんを不合せだの、卑怯だのと云つた事を、つくづく後悔しましたわ。

春雄 聽かれたら仕様がなないが、あれは全く僕の眞情なのだ。どうか悪く思はないでくれ。

千代子 悪く思ふ理由がないぢやありませんか。妹の癖に今迄兄さんの眞情をお察しする事が出来なかつたのが、悪いのよ。兄さんはほんとに合せな方だわ。兄さん程幸福な方はめつた

にないわ。

春雄 さうさ、お前の云ふ通りだよ。

千代子 あたしの無分別な了見から、餘計なおしやべりをして、たとへ半日でも兄さんに御心配を掛けたのが申譯がないと思ひますわ。あたしはもう何も疑がつて居やしなくつてよ。あなたの方のお話を聞いて見ると、いくら證據を掴まうとしたつて、掴める筈がないんですもの。ねえ兄さん、ほんとに勘忍して下さいまし。お互ひに笑つて別れませうよ。

春雄 笑つて別れるのはいゝが、明日歸つたらどうだらう。折角和睦したんだから、今夜はもう一と晩泊つて行くな。

千代子 和睦したから今夜歸るんですよ。もう疑が晴れた以上は、忙しい體で鎌倉に居る用はないんですもの。一刻も早く内へ歸つて、原田に安心させた方がいゝわ。

春雄 まあ、それもさうだけれど……

梅子 上手より道入つて来る。

千代子 あ、嫂さん、先程は失禮致しました。あたし都合があつて、今晚歸る事になりましたの。

梅子 大さう急なお話ですね。いくら喧嘩をしたつて、もう一と晩ぐらゐ泊つていらつしやいよ

それに明日は宅も東京まで行きますから、丁度いゝぢやありませんか。

千代子 ですけど、又今度伺ひますわ。

梅子 お忙しいでせうから、そんなにいらつしやらなくつてもよござんすよ。

千代子 あたし嫂さんと仲直りをしない約束でしたけれど、すつかり後悔しましたわ。だから嫂さん何卒機嫌を直して、勘忍して下さいな。

梅子 しかしあなたとは、どうしても和睦出来ない譯があるの。

千代子 それもあたしが詫りますわ。嫂さんにつまらない疑を掛けのは、全くあたしが悪かつたんです。今兄さんにお詫をして、残らず取り消して了ひましたわ。

梅子 さう仰つしやればあたしだつて、何とも思やしませんよ。

千代子 今迄の事は、さつぱり水に流して下さいまし。

梅子 えゝ、よござんすとも。

千代子 それぢや、歸りの支度をして參りますから。

千代子 上手より退場。

梅子 千代子さんは、ほんとに後悔したのか知ら。

春雄 さういつ迄も人を疑ふもんぢやない。悪いと悟つて詫つたのだから 嘘ぢやなからう。

梅子 あゝ云ふ風に優しくされると、あたしも腹を立てないけれど……

春雄 あゝ、此れで己れもせいせいした。

雪子 下手より入る

雪子 千代子さんが今歸るんだつてねえ。もう四五日遊んで行けばいゝのにねえ。あんまり出し
抜けぢやないか。

春雄 なあに、昨日から歸る歸るつて、さう云つて居たんです。

雪子 せめて明日にしたらどうだらう。今夜はもう九時過ぎだよ。春雄さんから勸めて御覽な。

春雄 僕も勸めたんですが、承知しないんです。それに忙しい體ですから、歸した方がいゝでせう。

雪子 又何か、梅子と喧嘩でもしたんぢやないのかい。

梅子 いゝえ、喧嘩どころか、すつかり仲直りをしちやつたのよ。

雪子 仲直りをするのが當り前だよ。同い年でもお前さんの方が、嫂さんぢやないか。

千代子、歸りの身支度を整へて、静子を抱きながら上手より登場。

千代子 それぢや皆さん長々御厄介になりました。(静子を下ろして、三人に會釋する)

雪子 さうですか。一向お構ひ申しませんで、失禮ばかり致しました。何卒お宅へ宜しく仰つし
やつて下さいませよ。

千代子 はい、有り難うございます。兄さんも嫂さんも御機嫌よろしう。

梅子 どうぞ原田さんに宜しく。二人共仲直りをしましたからつて、よくさう云つて頂戴よ。

千代子 えゝ云ふわ。—— 静ちゃん、東京へお歸りになつたらきつとお遊びに入らつしやい。

静子 伯母さん、もつと鎌倉に居らつしやいよう。

千代子 (ケツト静子を抱きしめる) でも伯母さんは御用があるんですもの。……ね、静ちゃん

はいゝお子さんね。

女中まつ下手より登場。

まつ 奥様、お俵が参りました。

千代子 あゝさうですか。それでは御免下さいまし。

一同立ち上つて廊下に出る。

雪子 遅くなると澁谷の方は物騒ですから、よく氣を付けて入らつしやいよ。

千代子 はあ、今夜は月がありますから、大丈夫でございます。

雪子 (硝子より戸外を見る) ほんとに穏やかな、いゝ月だこと、まるで晝間のやうだ。

千代子を送りながら皆々下手へ退場。幕

大正十五年九月十日印刷
大正十五年九月二十日發行

〔定價金壹圓八拾錢〕

潤一喜劇集

發行所

著作者	谷崎潤一郎
發行者	神田豐穂
印刷者	本間十三郎
印刷所	清揚社

東京市日本橋區數寄屋町一番地
東京市牛込區辨天町一五七番地

株式會社 春秋社

振替東京二四八六一番
電話大手二二二四番

書叢「生人と藝術」

柳田泉譯	木村毅譯	松崎實著	辻・クエンシ著	安島新三郎譯	レオバルチー泉譯	シヨベンハウエル譯	佐久間政一譯	ギツシンク著	藤野滋著	ベエタ一著	ラスキーン著
アミエルの日記(後)	アミエルの日記(前)	切支丹殉教記	阿片溺愛者の告白	トルストイの生涯	大自靈魂の對話	ハクヨエ論文集	イクトロフトラの手記	ルネッサンス	藝術講話		
上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半	上菊製半
送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料
價貳圓八拾錢	價貳圓五拾錢	價壹圓八拾錢	價壹圓貳拾錢	價壹圓五拾錢	價壹圓六拾錢	價壹圓五拾錢	價壹圓五拾錢	價壹圓五拾錢	價壹圓五拾錢	價壹圓五拾錢	價壹圓五拾錢

目書行發社秋春

野溝七生子著	藤森成吉著	宮森麻太郎譯編	柳田泉譯	眞山青果著	内山賢次譯	武者小路實篤著	吉田悅藏著	古田大次郎著	萩原井泉水著	松浦爲王編	萩原井泉水輯	湯本五郎治編
小長説編	狼へ(我勞動)	英米、近代劇一幕物十種	クロムウエル(1)(2)	江戸城總攻め	チエホフ書簡集	死に克つには	湖畔聖話	死の懺悔	新らしき俳句の作り方	鳴雪俳句集	俳句集大空	遺稿九番日記
送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料	送料
價貳圓五拾錢	價壹圓五拾錢	價壹圓八拾錢	價壹圓四拾錢	價壹圓四拾錢	價貳圓五拾錢	價壹圓八拾錢	價壹圓八拾錢	價貳圓五拾錢	價壹圓七拾錢	價壹圓八拾錢	價壹圓四拾錢	價貳圓六拾錢

類書譯繙

加藤イモシト著	加藤イモシト著	加藤イモシト著	加藤イモシト著	生田春月著	生田春月著	メレチエコフスキー著	ヘルツェン著
農	農	農	農	詩の本	新詩集	宗教家のドストイエフスキと	思ひ出の記
民 1 (秋)	民 2 (冬)	民 3 (春)	民 4 (夏)	(ハイネ全集) 第一巻	(ハイネ全集) 第二巻		
布装 四六	布装 四六	布装 四六	布装 四六	布装 菊半	布装 菊半	布装 菊半	布装 菊半
送料 拾貳圓五拾錢	送料 拾貳圓八拾錢	送料 拾貳圓八拾錢	送料 拾貳圓八拾錢	送料 拾貳圓五拾錢	送料 拾貳圓五拾錢	送料 拾貳圓五拾錢	送料 拾貳圓五拾錢

~~517~~
408

終

